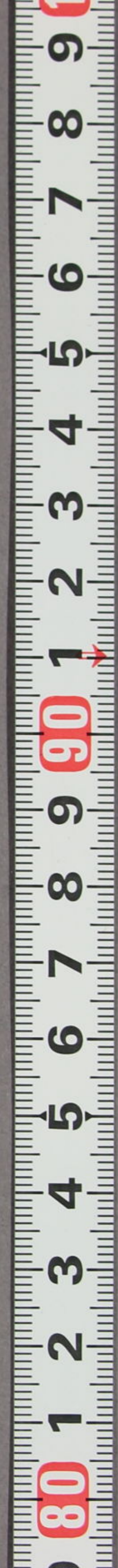
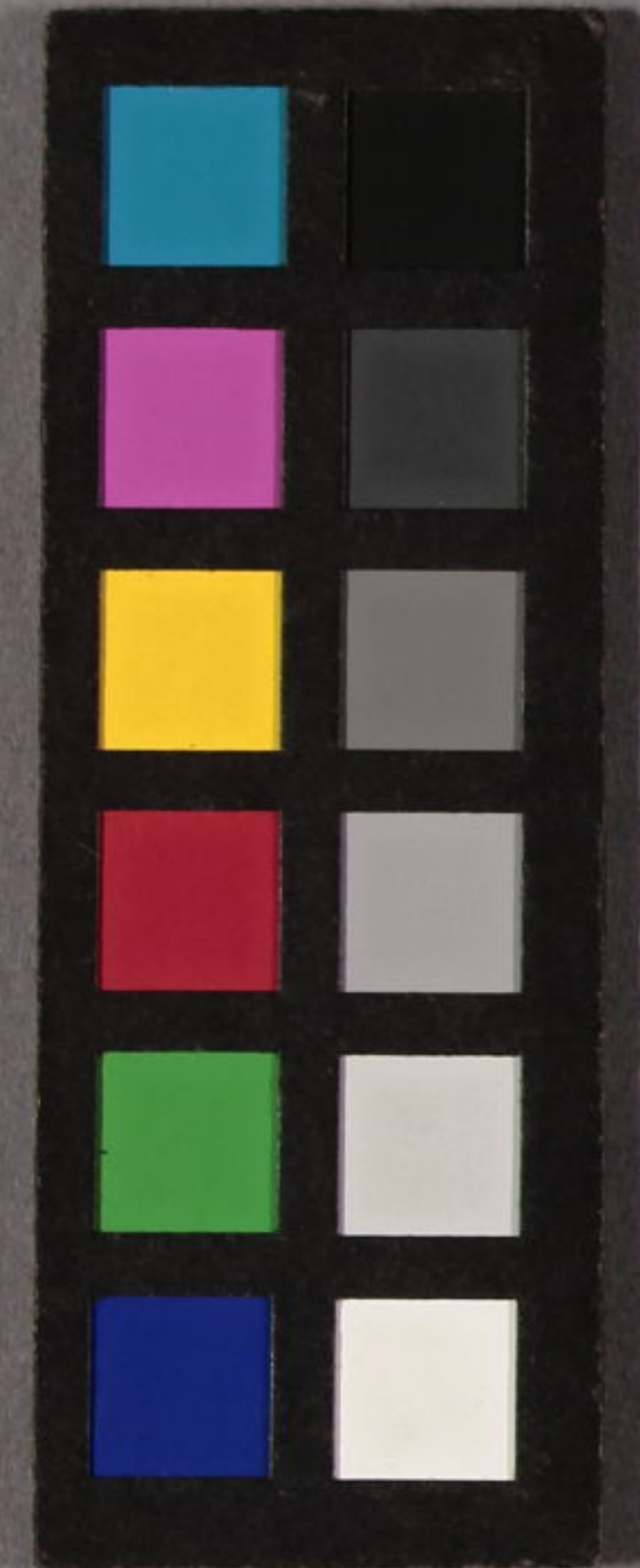


俳林良技集

春



雙菴菴水壺翁撰

俳林良枝集

江戸書林

萬笈閣

笑海を遺言をむとて右山紙を十丈の梁方七尺の
板とな海を松栢ををほづいそれと芥少く志はく
はひてよ此海ありしすなごら翁きに似く又易記
寫し也さて来さき〜曲直杖用於す杖直道之無
なる〜ふたふすららざる業あらん且友双菴居士
正風の道場を建むと俳林のこの教ふ後きふと中入
良枝を撰むるもとよ理門生を両家分けられしを起
りよ存さきむつたの来〜〜〜〜長さを後後き
を切のふ〜〜自能り〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

序

度から後獲らるる規矩準繩はつぎさる所のことを
時世の棟梁といふもさるるをたのらむかく以て人を
りしつていふもさるる仕法様をよみてあきらめたる
暇故たるをあらはせしめて手齊げしるなり
墨壺をならす

安政五年四月

為任庵日記

樹石書

一席一

例言

一 能讀の句集は多しといふは題毎に注解をわし書
辨るべき事且より集書よむる近一題もさるる
多し筆字形もあつた細注を入る古人今人能句哉
別より一瞬に足やさるるむさるる物量の序
上は情もあましを撰り一助もあましを撰り
の協者あり
一 漢文の注解をよむるは漢易きをよむるやうけ
るくも素士のたうりたるをよむるやうのたうり



さす利

一 引書ハ増山の井を宗とす之よりハ東海の晩山好士
 季忠の予をたせ紙篇を窺ひしより先ハ季忠翁
 能峰山井を祖し志のくくくくの新まじき事より
 のくハその一つあり其おハ諸書流よりりて是く
 一 題名を俗林良杖集と號しより少志のり款及よ
 既母良杖集連款と連集良杖集よりりて母よ名
 高く行と世知知と志の族ハ此題号を大のこ
 事りたりちちしよりりて亦俗名より俗集良杖と

例 一

唱了富川山由著一書ハ何れもを也とより母よ
 埋せりて標影を唱しハかき入款キハ何とありぬた
 ちも出るとあせりりりりりりりりの編集をおこし保しく
 も形号ありて世弘めんとす事せしと亦ありり短也
 のりハ書籍の字見ハ博ららさしハ秘冊興編を何い
 とも事ハ何れもさるる尋句端耳ちのきも述べもをせし
 一 何れ多の母とて免より角と母初学の者とも思ひ
 おあし集ちをハ此その志連涉隨を傳ふる事ありぬ
 一 集冊特名の傍ハ國名を記しりて見易きを宗とす事あり

物句加入の風子終り近句毎も代まらぬ一々毎六二三句の
外ハ除く於同名同字の風賞ハ終り近句をさし挙ぐ傍よ
古の字何れハ古人の名と知れぬ

一 撰者の句ハ加入せざるにせしむるの係多きを歌子集たる

他係又高らざるにせしむる集中の終りハ五七句をそのまゝ

と尾端を素うとせしむる拙作を著しぬるもの也

一 引書ハ一字名を挙へき例多きを注毎終りともありぬる

ひびの一字を□の中ハ取らぬに記すもさしむる同字も取ら

ざる上下の二字又ハ下の一字を挙ぐ余る歌集ハ之ハ例

引書目録

書紀	日本書紀	延	延喜式	公	公事根元	和	和名抄
禁	禁秘抄	名	名目抄	主	主水式	湯	御湯殿記
風	風土記	拾	拾遺抄	世	世談問答	歳	日本歳時記
歳雜	歳時雜記	義	和訓義解	東通	東國通鑑	和	和漢三才圖會
歌名	日本釋名	愚	愚見抄	雜	雜談抄	編	編年略
多	多識篇	要	年中故吏要言	圖	訓蒙圖彙	食	本朝食鑑
令	令義解	壘	梁塵抄	催	催馬樂	真	真名曆
卜	卜部秘說	八	八雲御抄	萬	萬葉集	古	古今集

夫夫木集 堀堀川百首 龜龜山七百首 藏藏玉和歌集

年中行事 歌合 職人盡 歌合 寶 歌林 良枝集 古榮 古今 榮雅集

詞 詞林 采葉集 朗朗詠集 袖袖中抄 異 異名 分類

真與義抄 萍萍の跡 桂桂花抄 藻藻塩草

秘 宗祇 秘中抄 無 長明 無名抄 增增山井 滑 滑稽 雜談

傘 御傘 毛毛吹草 年年浪草 隻隻繩輪

をを死す記 細與の細道 脣風月帖 諧 隨齋 諧話

糸 糸切齒 源源氏物語 伊伊勢物語 狹狹衣

枕枕草紙 徒徒然草 土土佐日記 六十六夜日記

引日一

月月令廣義 事事文類聚 律前漢書 荆荆楚 歲時記

嘉古文前集 文 文 選 尚 尚 書 羊 公羊傳

范靈公 范饋飾儀 圓圓機活法 蟲 蟲海集 十 十節錄

天天寶遺事 大大裁禮 風通 風俗通 三 三禮義宗

賞尚書大傳 鄴 鄴中記 禮 禮 記 釋 款氏 要覽

元元享釈書 報 報息經 孟 孟蘭 盆 經 形 形心靜撮

夢夢華錄 法 法華新註 埃 埃囊抄 提 提要錄

本本草綱目 大本 大和本草 紫 紫塵朗詠 後 後天文志

菰菰類圖經 農 農政全書 花 花 彙 羅 羅山文集

五	五雜俎	帛	清補帛草紙	酒	酒方書	苑	新統犬苑波
河	河海抄	葭	許六發明辨	湖	去來湖東問答	屑	糸屑
通	通俗志	四	四季部類	梁	梁書	畜	本草圖譜
著	古今著聞集	猿	續猿蓑	職	職原抄	躬	躬恒秘藏抄
技	技折菰	仙	仙覺抄	新	新千載集	書	書言故吏
兄	句兄弟	孝	孝經	女	崔浩女義	題	題叢
百	世夏百談	零	零陵記	舊	舊夏記	數	和漢名數
山	山家集	鑑	本朝文鑑	爲	十論爲辨	武	武江年表
潛	潛確類書	晉	晉樂志	福	福州府志	二	二水記

引目二二

善之部 同録

元	元日	一	元日	二	のの妻	一	のの妻
妙	妙玉の妻	一	妙玉の妻	二	のの妻	一	のの妻
社	社空	一	社空	二	のの妻	一	のの妻
星	星佛	三	星佛	四	星を唱	一	星を唱
鏡	鏡餅	一	鏡餅	二	鏡餅	一	鏡餅
椒	椒柏酒	一	椒柏酒	二	椒柏酒	一	椒柏酒
氷	氷様	一	氷様	二	氷様	一	氷様
素	素直の神	五	素直の神	六	素直の神	一	素直の神
真	真約	一	真約	二	真約	一	真約
粗	粗廻	一	粗廻	二	粗廻	一	粗廻
門	門傍	七	門傍	八	門傍	一	門傍
松	松の神	一	松の神	二	松の神	一	松の神
菱	菱餅	一	菱餅	二	菱餅	一	菱餅
蓮	蓮葉勝	一	蓮葉勝	二	蓮葉勝	一	蓮葉勝
五	五万束	一	五万束	二	五万束	一	五万束

初芝店	子日遊	三毬步	うゆ杖	氷厚	雪間	雪の飛石	雪の雪	少笑	蒸	毒考結	永き日	風光	衣更著	社日	出代	貝の風	真日
十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十	三十一	三十二	三十三
伝達の月	和杖	爆杖	氷入	凍結	雪重	雪重	雪重	水溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜
真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日
初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日

初芝店	子日遊	三毬步	うゆ杖	氷厚	雪間	雪の飛石	雪の雪	少笑	蒸	毒考結	永き日	風光	衣更著	社日	出代	貝の風	真日
十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十	三十一	三十二	三十三
伝達の月	和杖	爆杖	氷入	凍結	雪重	雪重	雪重	水溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜	氷溜
真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日	真日
初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日	初子の日

真日

夏之部題目錄

乾坤之部

四月	一	神月	二	大久敷	八	秋夜	九
梅天	、	小満の節	、	清和の天	、	短夜	、
响易夜	十	夏の秋風	、	扇	廿八	夜	三十
日傘	、	重五	廿八	夏の花	、	扇	廿九
端午の節	、	萬葉帳	、	菜玉	、	扇	、
扇浦刀	、	印地赤	、	芒種の花	、	扇	、
扇掛ノ胃	、	五月雨	、	五月晴	、	扇	、
梅の雨	、	五月雨	、	五月晴	、	扇	、
黒雨	、	五月雨	、	五月晴	、	扇	、
六月	、	水無月	、	水無月	、	扇	、
小暑	、	七月	、	夕立	、	扇	、
天候	、	八月	、	夕立	、	扇	、
天候	、	八月	、	夕立	、	扇	、
井筒	、	三伏	、	夕立	、	扇	、
納涼	、	枕	、	夕立	、	扇	、
雲の峰	九	打水	、	夕立	、	扇	、

燈籠	六四	山灯を奪り	、	六六	業師古書	、	、
清浄	、	経ふ	、	六七	石山系	、	、
安曇日香	、	古書	、	、	壬生志佛	、	、
新学	、	梅屋系	、	、	さくら史志伝	、	、
山村系	、	山掛	、	七五	山掛	、	、
山の峰	、	山掛	、	、	山掛	、	、
衣	、	福	、	、	子日記	、	、
古振舞	、	龍舞	、	、	子日記	、	、
大日香	、	八	、	、	、	、	、
山若	、	系	、	、	、	、	、
麻尾藻	、	系	、	、	、	、	、
画巻	、	公多	、	、	、	、	、
初観行	、	女叙位	、	、	、	、	、
山弓奏	、	、	、	、	、	、	、
山新	、	、	、	、	、	、	、
粹眞	、	、	、	、	、	、	、
、	、	、	、	、	、	、	、

神祇	百	百	百	百	百	百	百	百
神祇之部								
多賀系	四	五	六	七	八	九	十	十一
橘の系	二	三	四	五	六	七	八	九
杜木系	三	四	五	六	七	八	九	十
松田系	四	五	六	七	八	九	十	十一
佛生系	五	六	七	八	九	十	十一	十二
伊勢神系	六	七	八	九	十	十一	十二	十三
日光系	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
花田系	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五
日向系	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六
花供	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七
夏入	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八
因賀系	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九
星の表系	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
直社系	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一
山田系	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二
因月會	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
月神	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四
岩戸系	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五
系破系	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六
本城山	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七
天神山	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八
蟹山	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九
山崎系	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十

新系	世二							
新系	世二	古系						
新系	世二	古系	二					
新系	世二	古系	三					
新系	世二	古系	四					
新系	世二	古系	五					
新系	世二	古系	六					
新系	世二	古系	七					
新系	世二	古系	八					
新系	世二	古系	九					
新系	世二	古系	十					
新系	世二	古系	十一					
新系	世二	古系	十二					
新系	世二	古系	十三					
新系	世二	古系	十四					
新系	世二	古系	十五					
新系	世二	古系	十六					
新系	世二	古系	十七					
新系	世二	古系	十八					
新系	世二	古系	十九					
新系	世二	古系	二十					
新系	世二	古系	二十一					
新系	世二	古系	二十二					
新系	世二	古系	二十三					
新系	世二	古系	二十四					
新系	世二	古系	二十五					
新系	世二	古系	二十六					
新系	世二	古系	二十七					
新系	世二	古系	二十八					
新系	世二	古系	二十九					
新系	世二	古系	三十					

天中の月	名月	巳五	結宵	巳六	夕の月
月々宵	月々	巳七	月の雪	巳八	月の雨
十六夜	月夜	巳九	秋の月	巳九	秋の雪
九月	長月	巳十	秋の夜	巳十	秋の霜
九月	長月	巳十一	秋の夜	巳十一	秋の霜
九月	長月	巳十二	秋の夜	巳十二	秋の霜
秋の暮	秋の暮	巳十三	秋の暮	巳十三	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳十四	秋の暮	巳十四	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳十五	秋の暮	巳十五	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳十六	秋の暮	巳十六	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳十七	秋の暮	巳十七	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳十八	秋の暮	巳十八	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳十九	秋の暮	巳十九	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳二十	秋の暮	巳二十	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳二十一	秋の暮	巳二十一	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳二十二	秋の暮	巳二十二	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳二十三	秋の暮	巳二十三	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳二十四	秋の暮	巳二十四	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳二十五	秋の暮	巳二十五	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳二十六	秋の暮	巳二十六	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳二十七	秋の暮	巳二十七	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳二十八	秋の暮	巳二十八	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳二十九	秋の暮	巳二十九	秋の暮
秋の暮	秋の暮	巳三十	秋の暮	巳三十	秋の暮
植物之部	植物之部	巳三十一	植物之部	巳三十一	植物之部
樹	樹	巳三十二	樹	巳三十二	樹
木槿	木槿	巳三十三	木槿	巳三十三	木槿
男部も	男部も	巳三十四	男部も	巳三十四	男部も
葉	葉	巳三十五	葉	巳三十五	葉
桔梗	桔梗	巳三十六	桔梗	巳三十六	桔梗

秋目一

葛	葛	二九	葛	二九	葛
乙切	乙切	三〇	乙切	三〇	乙切
葛花	葛花	三一	葛花	三一	葛花
紫葛	紫葛	三二	紫葛	三二	紫葛
花	花	三三	花	三三	花
花	花	三四	花	三四	花
花	花	三五	花	三五	花
花	花	三六	花	三六	花
花	花	三七	花	三七	花
花	花	三八	花	三八	花
花	花	三九	花	三九	花
花	花	四〇	花	四〇	花
花	花	四一	花	四一	花
花	花	四二	花	四二	花
花	花	四三	花	四三	花
花	花	四四	花	四四	花
花	花	四五	花	四五	花
花	花	四六	花	四六	花
花	花	四七	花	四七	花
花	花	四八	花	四八	花
花	花	四九	花	四九	花
花	花	五〇	花	五〇	花
花	花	五一	花	五一	花
花	花	五二	花	五二	花
花	花	五三	花	五三	花
花	花	五四	花	五四	花
花	花	五五	花	五五	花
花	花	五六	花	五六	花
花	花	五七	花	五七	花
花	花	五八	花	五八	花
花	花	五九	花	五九	花
花	花	六〇	花	六〇	花

稻	六十七	九葉の若葉	葉	六十七	秋の蜂	六十七	秋の蜂	六十八
若葉	六十九	具ちる	梅の葉	六十七	秋の蜂	六十八	秋の蜂	七十八
極	八十	極	名の木	六十七	秋の蜂	六十九	秋の蜂	七十八
柳		柳	葉	六十七	秋の蜂	七十一	秋の蜂	八十一
木の実		木の実	葉	六十七	秋の蜂	七十二	秋の蜂	八十二
柿		柿	葉	六十七	秋の蜂	七十三	秋の蜂	八十三
柿の実		柿の実	葉	六十七	秋の蜂	七十四	秋の蜂	八十四
梨子		梨子	葉	六十七	秋の蜂	七十五	秋の蜂	八十五
栗		栗	葉	六十七	秋の蜂	七十六	秋の蜂	八十六
栗の実		栗の実	葉	六十七	秋の蜂	七十七	秋の蜂	八十七
松		松	葉	六十七	秋の蜂	七十八	秋の蜂	八十八
松の実		松の実	葉	六十七	秋の蜂	七十九	秋の蜂	八十九
萩		萩	葉	六十七	秋の蜂	八十	秋の蜂	九十
萩の実		萩の実	葉	六十七	秋の蜂	八十一	秋の蜂	九十一
菘		菘	葉	六十七	秋の蜂	八十二	秋の蜂	九十二
菘の実		菘の実	葉	六十七	秋の蜂	八十三	秋の蜂	九十三

生類之部

秋の葉	三二	蜂	秋の蜂	三二	秋の蜂	三二	秋の蜂	三二
蜂	三三	蜂	秋の蜂	三三	秋の蜂	三三	秋の蜂	三三
蜂	三五	蜂	秋の蜂	三五	秋の蜂	三五	秋の蜂	三五
蜂	三九	蜂	秋の蜂	三九	秋の蜂	三九	秋の蜂	三九
蜂	四一	蜂	秋の蜂	四一	秋の蜂	四一	秋の蜂	四一
蜂	四九	蜂	秋の蜂	四九	秋の蜂	四九	秋の蜂	四九
蜂	五二	蜂	秋の蜂	五二	秋の蜂	五二	秋の蜂	五二
蜂	五八	蜂	秋の蜂	五八	秋の蜂	五八	秋の蜂	五八
蜂	六二	蜂	秋の蜂	六二	秋の蜂	六二	秋の蜂	六二
蜂	六三	蜂	秋の蜂	六三	秋の蜂	六三	秋の蜂	六三
蜂	六四	蜂	秋の蜂	六四	秋の蜂	六四	秋の蜂	六四
蜂	六六	蜂	秋の蜂	六六	秋の蜂	六六	秋の蜂	六六
蜂	六七	蜂	秋の蜂	六七	秋の蜂	六七	秋の蜂	六七
蜂	六九	蜂	秋の蜂	六九	秋の蜂	六九	秋の蜂	六九
蜂	七一	蜂	秋の蜂	七一	秋の蜂	七一	秋の蜂	七一
蜂	七二	蜂	秋の蜂	七二	秋の蜂	七二	秋の蜂	七二
蜂	七三	蜂	秋の蜂	七三	秋の蜂	七三	秋の蜂	七三
蜂	七四	蜂	秋の蜂	七四	秋の蜂	七四	秋の蜂	七四
蜂	七五	蜂	秋の蜂	七五	秋の蜂	七五	秋の蜂	七五
蜂	七六	蜂	秋の蜂	七六	秋の蜂	七六	秋の蜂	七六
蜂	七八	蜂	秋の蜂	七八	秋の蜂	七八	秋の蜂	七八
蜂	八〇	蜂	秋の蜂	八〇	秋の蜂	八〇	秋の蜂	八〇
蜂	八二	蜂	秋の蜂	八二	秋の蜂	八二	秋の蜂	八二
蜂	八三	蜂	秋の蜂	八三	秋の蜂	八三	秋の蜂	八三
蜂	八四	蜂	秋の蜂	八四	秋の蜂	八四	秋の蜂	八四
蜂	八五	蜂	秋の蜂	八五	秋の蜂	八五	秋の蜂	八五
蜂	八六	蜂	秋の蜂	八六	秋の蜂	八六	秋の蜂	八六
蜂	八七	蜂	秋の蜂	八七	秋の蜂	八七	秋の蜂	八七
蜂	八八	蜂	秋の蜂	八八	秋の蜂	八八	秋の蜂	八八
蜂	八九	蜂	秋の蜂	八九	秋の蜂	八九	秋の蜂	八九
蜂	九〇	蜂	秋の蜂	九〇	秋の蜂	九〇	秋の蜂	九〇
蜂	九一	蜂	秋の蜂	九一	秋の蜂	九一	秋の蜂	九一
蜂	九二	蜂	秋の蜂	九二	秋の蜂	九二	秋の蜂	九二
蜂	九三	蜂	秋の蜂	九三	秋の蜂	九三	秋の蜂	九三
蜂	九四	蜂	秋の蜂	九四	秋の蜂	九四	秋の蜂	九四
蜂	九五	蜂	秋の蜂	九五	秋の蜂	九五	秋の蜂	九五
蜂	九六	蜂	秋の蜂	九六	秋の蜂	九六	秋の蜂	九六
蜂	九七	蜂	秋の蜂	九七	秋の蜂	九七	秋の蜂	九七
蜂	九八	蜂	秋の蜂	九八	秋の蜂	九八	秋の蜂	九八
蜂	九九	蜂	秋の蜂	九九	秋の蜂	九九	秋の蜂	九九
蜂	一〇〇	蜂	秋の蜂	一〇〇	秋の蜂	一〇〇	秋の蜂	一〇〇

經本流	十八	近大	大文字大	物法大
門火	十九	八幡安座次	解反字	友右納
地蔵系		種屋	四水村系	堺天神系
心連系		白鬚用此	教賀系	生を放
放生會		津八幡系	八幡系	志賀八幡系
豊浦系		宇依系	築崎系	葎大屋系
彼岸		山雲系	業名系	死活林系
秋社	四十九	因柱室角力七十一	舍利系	醍醐系
寄書ノ宮系		猪ノ系	奥布系	生玉系
四ノ宮系	七十三	下智羽系	倒幣	山雞解
任古角力系		任古ノ市	室市	井市
白河系	七十四	一葉系	老念系	小倉系
栗田系		一文系	勸学系	神田系
何野山延家		夜芸抄骨系	島崎系	山口系
吳葉系	七十六	官後系	盛利女系	松夷系
八幡宮の歌		上南与系	天王寺隆頂	大泰系
宿系		天満瑞流系	木幡系	葛岳系
送餐系		北山系	坐广系	鳴階系

神	六十四	小宮	沙魚	菓山子	六十七
焼串	六十九	尾代系	引板	子	
尾城鴨		綱代系	裁敷を志	紅葉耐	八十九
衣倉ノ部			霜踏系		九十二
枝ぎげ	十三	西派	根草	青葛系	
附の系	廿二	熱麦	蓮の飯	刺鱈	十六
量海	七十一	沼海	燗束	夜折	五十六
ゆき	八十三	新束	九日小神	ゆき	八十二
湯の海	八十九	神	新葛系	新海	
神歌ノ部					
杉結	四	門系	小宮系	鏡系	十
送の山		六系	逆鏡	換買	
子日活		十系	冬の月	施儀鬼	
玉系		中系	杉徑	逆大	十三
血の馬	十四	麻壳系	墓系	生舟系	
焼妙	十六	切系	三井与女情	つと	

津村系
 公事 故 七十七
 任志の林送 九十三
 楸ノ葉戴く三 四十八
 約迄 四十八
 解奠 四十九
 秋の交 御燈 七十
 重陽宮 七十二
 不徳田奏 四十九

冬之部 題目録

乾坤之部

十月	一	神皇月	二	初冬	三	小六月	三
小亥	一	亥の子	二	冬の日	三	冬の夜	三
立冬の節	六	冬され	五	冬雪	十	冬寒	十二
冬梅	六	下えの日	九	初雪	十	炉開	十二
巨燧	十四	火桶	九	火鉢	十三	燈火	十二
みろり	十四	温石	十七	湯婆	十三	神時	十五
時雨	十四	志守き	十七	霜	十四	風	十五
神氷	世三	鏡氷	十七	雪	世四	冬の月	十五
月消る	世五	雪さき	十七	掃雪	世四	炭の月	十五
炭	世五	液雨	十七	掃雪	世四	雪の月	十五
雪年	世五	山吹	十七	雪田	世四	雪の月	十五
冬雪	世五	冬見和	十七	十二月	世四	雪の月	十五
冬雪	世五	一場の雪	十七	子燈籠	世四	雪の月	十五
雪の日	世五	雪入	十七	雪	世四	雪の月	十五
雪	世五	雪見	十七	雪ちる	世四	雪の月	十五
班雪	世五	雪志守き	十七	雪	世四	雪の月	十五

雪のり	六十七	雪のり	六十七
雪のり	六十八	雪のり	六十七
雪のり	六十九	雪のり	六十七
雪のり	七十	雪のり	六十七
雪のり	七十一	雪のり	六十七
雪のり	七十二	雪のり	六十七
雪のり	七十三	雪のり	六十七
雪のり	七十四	雪のり	六十七
雪のり	七十五	雪のり	六十七
雪のり	七十六	雪のり	六十七
雪のり	七十七	雪のり	六十七
雪のり	七十八	雪のり	六十七
雪のり	七十九	雪のり	六十七
雪のり	八十	雪のり	六十七
雪のり	八十一	雪のり	六十七
雪のり	八十二	雪のり	六十七
雪のり	八十三	雪のり	六十七
雪のり	八十四	雪のり	六十七
雪のり	八十五	雪のり	六十七
雪のり	八十六	雪のり	六十七
雪のり	八十七	雪のり	六十七
雪のり	八十八	雪のり	六十七
雪のり	八十九	雪のり	六十七
雪のり	九十	雪のり	六十七
雪のり	九十一	雪のり	六十七
雪のり	九十二	雪のり	六十七
雪のり	九十三	雪のり	六十七
雪のり	九十四	雪のり	六十七
雪のり	九十五	雪のり	六十七
雪のり	九十六	雪のり	六十七
雪のり	九十七	雪のり	六十七
雪のり	九十八	雪のり	六十七
雪のり	九十九	雪のり	六十七
雪のり	一百	雪のり	六十七

雪のり	七十	雪のり	七十
雪のり	七十一	雪のり	七十
雪のり	七十二	雪のり	七十
雪のり	七十三	雪のり	七十
雪のり	七十四	雪のり	七十
雪のり	七十五	雪のり	七十
雪のり	七十六	雪のり	七十
雪のり	七十七	雪のり	七十
雪のり	七十八	雪のり	七十
雪のり	七十九	雪のり	七十
雪のり	八十	雪のり	七十
雪のり	八十一	雪のり	七十
雪のり	八十二	雪のり	七十
雪のり	八十三	雪のり	七十
雪のり	八十四	雪のり	七十
雪のり	八十五	雪のり	七十
雪のり	八十六	雪のり	七十
雪のり	八十七	雪のり	七十
雪のり	八十八	雪のり	七十
雪のり	八十九	雪のり	七十
雪のり	九十	雪のり	七十
雪のり	九十一	雪のり	七十
雪のり	九十二	雪のり	七十
雪のり	九十三	雪のり	七十
雪のり	九十四	雪のり	七十
雪のり	九十五	雪のり	七十
雪のり	九十六	雪のり	七十
雪のり	九十七	雪のり	七十
雪のり	九十八	雪のり	七十
雪のり	九十九	雪のり	七十
雪のり	一百	雪のり	七十

綿子	、	布子	、	念	、	纸子	、	四十九
被初	、	荒中	、	子節	、	修忌	、	卒一
養深	、	草子	、	子福	、	生忌	、	
神送	神祇	守造の湯	九十七	言曜	、			
維多會	四	連子忌	七	十夜	八	法忌	九	
西云式	、	重長羅索	、	芭蕉忌	、	西辰彦	、	
大社神子	、	西云式	十一	東福開忌	十	夷儀	、	
神連	、	大衆忌	、	一神集	、	神のあち	、	
重長羅索	、	西日衆	、	尚麻索	、	山科索	、	
揚家索	、	尚宗索	、	中山索	、	神川索	、	
大長夜索	、	園禪神索	、	吉田索	、	お屋索	、	
日吉臨時系	九十六	心成臨時系	、	東三雲神索	九十七	日吉索	、	
小忌夜	、	日蓮の系	、	神楽歌	、	里のく	、	
阿加女	、	操物歌	、	かゝ神母子	、	神道歌	五十七	
小雲張	、	子歌	、	子歌	、	大雲張	、	
庭燎	、	子歌	、	子歌	、	星	、	
	、	子歌	、	子歌	、	吹草索	、	

冬目二

室也忌	六十	神甲	、	大時渡	六十二	西佛子	、	
西云	、	守聖索	、	園の市	、	大神系	八十	
天智天皇出國忌	、	同忌の系	、	河名	、	最原寺塔頂	八十二	
温糖粥	、	大徳寺開山忌	、	和布川神子	八十二	高子の終る	、	
五乘天神系	八十四	守まろ	九十六	守まろ	九十七	新玉侍	六十	
更衣	四	故より之部	、	進糖食	、	進炉炭	五	
拜懐	、	射場始	七	抄集宣	、	屠奏	五十三	
釣貝冬玉	五十四	玄糸	、	履敷	、	襪穿る	、	
赤豆の油	、	玄糸	、	帳臺の試	、	殿上副破	五十六	
神の似	、	臺母御流	、	鏡魂系	、	折幣玄	、	
杵の叫	、	忌日の飯	八十一	西舞の下	、	被給	、	
杉葉の舞	八十一	河登上	、	六年童子の係	、	為斎の愛	、	
煮粥系	、	内信浦神索	、	過餅	八十一	鬼やち	八十二	
歳暮	、	内信浦神索	、	豆打	、	拾り	八十四	
るう姑	八十三	長分	、	豆打	、	船さき	八十五	
さき	、	冥舟	、	船さき	、	たくの乳	八十六	
吉田大後	、	尾お	、	尾お	、			

睦月

正月の夜は月夜うら
雪花や正月らしき
雪のうへ、蒼朧
正月の夜は月夜うら
むつきとちか
むつきとちか

只の日は一日もあまき睦月うら
由誓

年もいつまじりのうらむつきうら
水壺

元日

けさの春・あけの春・四方の春・初日の春・三つの春・この日
年の始・新玉の春・あけの春・年の立・あけの春・初年
あけの春・上日・年頭・鶴旦・聖節・歳旦・年の始・時の始・月の始
あけの春・三始・三元・元三・あけの春・あけの春・月の朝・日の朝
あけの春・あけの春

元日もあけの春の辰の朝
古 歳美

元朝

元朝の朝はあけの春の日の出の春
古 茶雷

明の春

寐の春はあけの春の朝の春
古 為山

今朝の春

誰やらあけの春の朝の春
古 翁

けさの春はあけの春の朝の春
古 野集

新玉の春

あけの春はあけの春の朝の春
古 勇賀

今日の春

あけの春はあけの春の朝の春
古 水壺

四方の春

白雪の春はあけの春の朝の春
古 蒼朧

あけの春はあけの春の朝の春
古 波田

菴の春

世を旅の朝はあけの春の朝の春
古 蒼朧

花の春

雪ふるよは鳥居のせむし花のさる

ムツ 多代女

人は富む地に住むをてそむの毒

エト 儼月

初空

初鳥へきし中を獅子の天宮うけ

古 一茶

その空をりの出るまての世をのめ

祖 知

日の始

逢ふ人よ跡をみまわりの始

下サ 旭 高

初日影

西む雪よ氷るあけりその日影

古 万 古

初手水

雪のれから雪よきあや初手水

下サ 月 杵

船のりまてしむつ井や初手水

菅 鷹

歳旦

雪のりる門き入年の初め

儼 友

初鶏

初鶏や妙は雨や初鶏のうら

未 足

その初鶏の初めをえいふうら

多代女

初鳥

里を初鳥の表やけつ

系 有 長

花をの初鳥の表やけつ

世 初

その初鳥の表やけつ

昇 左

四方拜

〔公〕元朝からの時をへき属星を唱へ天地四方 山後城

その初鳥の表やけつ 天地四方の拜ありとて雨五日ある星を始ある

星を唱

高年の末命星をうらつて返り唱

星 佛

在家の世俗星仏をうらつて返り唱

齒固

歯固いばくは、歯を固くする薬也。

齒のつめやちの歯の固き

清子

讓葉

ゆづり葉や一枝たりも物より

世負

齒朶

桐の歯朶天のうららと中へり

古鳳朗

鏡餅

鏡をち母死せむ父あや

古曉臺

うみ餅をちて鏡をぬるの桐

公眠

裏白

うら白やあやの寒山州

西馬

御藥供

増・菓子・唐蘇・白散・廣嶺花
天皇の御薬供は、天皇の御薬を奉る事也。増・菓子・唐蘇・白散・廣嶺花は、御薬供の御薬也。

屠蘇

日の光うらとちりてむ一君や
古 万古

椒柏酒・柑酒・柑觴

増・朝拜・奏賀・奏瑞・奏瑞

朝賀

朝賀は、天皇の御慶賀也。奏賀・奏瑞・奏瑞は、朝賀の御慶賀也。

元日郎會

諸司奏・七曜行書・水様・版赤
國柘奏・國柘笛

七曜御曆

日月水火木金土の七曜をまゝしつる

氷 様

去年氷室をさきあけり氷の厚薄を奏し

腹 赤

腹赤の贅ハ鯨と云ふ魚をさしつる連筑紫よりさしつる

元日御會の序よりさしつる也

國 栖 奏

國栖奏 吉野より行幸の時國栖人より一夜酒をさし

國栖くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

古 檮 堂

院 拜 禮

一日院奉のくくく院の神祀よりさしつる

祇園削懸の神事

元朝より一日の祇園の削懸よりさしつる

為し用ゆるさしつる一説大崎よりさしつる

春 四

まゝしつる

さしつる日よんりさしつるぬきつる

由 誓

歳徳の神

元方 柵

婆利塞女の神を元方は洗ひて

俗より元方よりさしつる神社

元 方

柵より眼をけつ

下 丹 分 炭

心何さあつて嬉しき元方の水

等 菜

毘沙門功德経

むりハ元朝よりさしつるの時

若 夷

是江戸より神双をさしつる

今 宛

ゆきつるやききく世をさしつる夷

古 系 宣

夷廻まがひ 大黒舞オウゴウマシ 民間の門をさうがひ舞う事終ま今江戸
吉原より唄ひ舞ふもの此余所より也

夷廻 大黒舞 旗まふや大黒舞は格子を配 氷壺

春駒 馬を這境のりけり馬をを
下より帯て志をこころみや

春駒 旗まふや大黒舞は格子を配 古 太 祖

鳥追 益を忌帛を以て面を覆し子なれき殺法をこあへて
民間の門よりふり出せをを逐て云元田をこのるを逐て
拂ふの癖より出るものあり附て云今江戸より女を食の綿笠をを
二弦を這きおれをうたふも是より半一よりみや

鳥追 古 一 具

傀儡師 夷廻のりけり其名無
ふるおふとこい出せ

傀儡師 阿波の鳴門を小唄の形 古 其角

夷廻のりけり其名無 古 結之

手相殿の梅もぬのりしかいら 古 湖中

猿引 程を舞うて腰の積をまきそのあり是馬摺神と
りふ神をまうらふもいなり

猿引 猿まふや一糸おとよ 観寺形 古 波 崎

祖廻し 唄もふ銀ののちんや程おれ 古 橋 泉

親と子共やうよ松之橋や猿まふ 古 布 山

家同士の生しとるへぬさる也 古 上 毛 琴 堂

門の神棚

在家の妻より、神をこの家へて、神を奉り、夜に
かきつけ、しを備へたるあり

神の灯や門下の見えよりの棚飾り

世貞

門松

・たて松・かきり松・のきり松・たかきり・かきり松
胡且將來の松のきりしをまをらふとけきり
をちきり作ら万世成るるをのち年六の松始の松ひよ
用より一糸禪園の正統仰き信へき世

月雪の為とも志る門の松

古去來

門松やそ留まのきり玄冥お

松悦

よし松や又あろま所の子松島

古藤島

炭たもしく末徳まきかきりうれ

ヒカチ 正法

餅竹

門餅

餅の餅を雪のちりし門餅

春湖

兼末も餅いづつまをりうきり

斜禱

松餅

國ふりの松のきりあり松餅

系 侯節

餅海老

餅海老親けりし母のなつり餅

子乙良

掛鯛

は鯛の月餅日よ和羹しそ食へハ温疫病をらるるの
邪棄を辟る

魚鯛や歯をきかきりし苗奈ののち

古 文翠

のち鯛や山の妻も取へのちせ

芳子

橙

代に赤をと呼び赤橘
の菓とす

若水

ついで井むき・井養水
若水桶

汲つて井も若水とありてあり

若水

汲あつても若水の水のたのむ

山子

井開

井むきや古井の若水一板

水壺

大駒

元日は大駒はたてたる茶を大駒と云ふく用とあり
骨と云ふとあり古駒ありと云ふもいふべし

文字の身は世に
方のより也

若餅

三ヶ日の内よつきたるをもちを
雑煮と云ふ用とあり

雑煮

若をもちや松の若もそふ搦と云ふ

拙絨

この餅は形もふ徳茶の若も代

水壺

かんきいもふ・いもののみ・むきいもふ・ひき豆・た若
ひきき半片・あのをれゆのけ

上下のけけゆもあき雑煮の若

為山

信濃の若もあきの雑煮の若

魚鱗

言もあつては若もあつては雑煮の若

九起

芋のかき

芋のかきを云はれをがとていふも雑煮あり
いもいもの多きその故表れと云ふ

若もあつては芋のかき

藤雅

名月と蛸のあされ芋のかき

糸文海

俵子

生海菜をいへり

俵積りよ五層の積古あつらひの味 ハサシ 菜正
之をつゝをいへり ハツ 牡丹
破りめや俵積り ハツ 牡丹

押鮎

鮎の年魚しるし ハツ 牡丹
変り ハツ 牡丹

押鮎 ハツ 牡丹

おし鮎 ハツ 牡丹

鏡草

正月一日大内 ハツ 牡丹
うへよ ハツ 牡丹

寶船

船のり ハツ 牡丹

宝船 ハツ 牡丹

宝船 ハツ 牡丹

宝船 ハツ 牡丹

年男

年男 ハツ 牡丹

庭寵

庭寵 ハツ 牡丹

庭寵 ハツ 牡丹

福藁

福藁 ハツ 牡丹

福藁 ハツ 牡丹

湯殿始 トウテン 始 ハジメ
 寶引 タカラヒキ 引 ヒキ
 福引 フクヒキ 引 ヒキ
 藏開 クラマキ 開 ヒキ
 著衣初 キヌキ 初 ハジメ

つとむききむすいせしあう三ヶ日の
 内吉目をとてこころをさるる
若きときしめせをさるるんさ起まぬ
 飼るのききん見せのう若き始

波 鴨 ハカモ
 双 岳 フタタケ
三保 岳 ミタケ
 古 其 角 コノツノ
 水 壺 ミヅウ
 玉 山 タマヤマ
 尾 村 ビノムラ
 水 壺 ミヅウ

春上

三ッ物連歌・同俳諧・裏白連歌・同俳諧
 初 夢 ハジメノユメ
 初 曆 ハジメノリキ
 手 毬 テマリ

まの若や都より角より
 初若やさめりの後より角より

何よりとけく都きくうりまの曆
 依若くむ評義の席や初若き

汗額より手毬よりよむむあひくれ
 紫よりまのませつくと手毬より

古 其 角 コノツノ
 古 後 物 コノノモノ
古 成 美 コノナミ
 波 月 ハツキ

宵の年・若き年

去年
今年

あまこし〜 歌をよみ遊し留りぬ

四端

神の饗の酒より城こそよき〜

琴意

今年

引ぬの静よりつるき〜

古木葉

ゆきよよ〜の影や 春 雪

雪笛

古年

ふる年の厚きよまきる氷の春

氷水

菜大根やふる年よりのけじり物

氷壺

春若し

春若し〜 陽よりみえぬ居

イソ乙郎

筆試・試毫

書初

書初の穀より〜

古道彦

かきめや水より柳の芽あら

花中女

吉書

〜みむら〜

控筆

〜の〜

村茶

筆始

の〜

不潔

旅の紀〜

出詞

接泉

三益の酒〜

△

文起

吹初

・笙・むちりまき
・笛の都あり
・舞初樂の始也

彈初

〜

氷壺

謡初

彈きめやたまふあはる民隠憂

佳景

松風もまゝ夜あけのきよは謡ひ初

古成美

むくろよえ方のつらうむむめ

平晴

松籬子

春神のいさめはしるやおを流し

世負

おを中子あふぬのゆききり

波瑠

千壽萬歳

〔年〕 方和國窪田筆尾高村は両生は

萬歳

〔年〕 今の世のあはれ我はは大江定基博學大夫より併返
りてあはれぬ人より正月の夜は目出度うなりて
あはれを忘るる様とせり今の世は弘里一に何万歳あはれなり。此
羽田よりよりの様多しもの上下を兼門よはた
あはれを唱るあはれは万歳よはたなり。あはれ

御降

〔滑〕 早あはれ
雪雨をいり

あはれやいりて舟を東より

後鳥

万葉の歌よきもの朝日のあは

景曉

あはれやあはれよとよのあは

山子

雨漏をいりて万歳をいり

景瓢

あはれやあはれよとよのあは

木葉

あはれやあはれよとよのあは

而后

あはれやあはれよとよのあは

帰舟

あはれやあはれよとよのあは

潮月

稻積

神降や氷の上より五重より
稲積・正月の積起き
稲つむよふ秋のあや老の歳
つよはむおきく春をよほして
稲積や日よりのまよるまよる
稲積

初商

初商・買初・初店卸・帳綴

初商

初市

初市や新起り起り見え世なり
まの市や盛り出さ家あり

初市

初賣

初賣やまの舞ぬ先は初なる
初賣

初賣

初荷

初荷つまの馬の初なる
舟積やまの初なる

初荷

節振舞

水まの朝昔はまの節
夕暮の舞はまの節

節振舞

節小袖

老嬢のまの節の風は初め
若さの節はまの節

節小袖

初芝居

人島はまの節はまの節
雨はまの節はまの節

初芝居

松の内

中の一の雨はまの節
中の一の雨はまの節

松の内

舟玉のつりや海も浪志のつり
出典 双岳
 舟玉のつりや海も浪志のつり
出典 双岳
 舟玉のつりや海も浪志のつり
出典 双岳

注連の内 春永 懸相文

陰陽師赤き布衣を若白布を以て面をなほひりしりし
 兩眼をうつりし其の婦をさきりしりし元日寅の
 時より糸師の町をさうまわりきりし
 此の事今もたえりしりし

舟玉のつりや海も浪志のつり
出典 双岳
 舟玉のつりや海も浪志のつり
出典 双岳
 舟玉のつりや海も浪志のつり
出典 双岳

水祝

滑 初春水祝をいふ事あり附に婚姻の人の大禮あり
 舟玉のつりや海も浪志のつり
出典 双岳

舟玉祭

獲元日舟玉に綴りしりし水祝をいふ事あり
 舟玉のつりや海も浪志のつり
出典 双岳

韋木

幸籠・葉盒子・幸木はか申枝の形あり此國より幸木と
 舟玉のつりや海も浪志のつり
出典 双岳

命之 葉曉

下サ 交水

古 白旗

出典 月岡

出典 双岳

とらふりしる盒子ハコのあまじくはしる門ねよゆひつをて
供物をば内へ供るより幸うらめまの都立幸ふ福と和州同一をよ
ばしる

あまきまのくちつと愛よ茶茶ハコ

樹石

空陰寺よ何とあまじくはしる盒子

水亭

久々クク画鶏貼戸エ 葦索アシノ 元日のありありやう園は画る勢を門下ゆへはあまき

如願ジョガ 事 唐土よ或も人馬遊若よぬねとや少女をを給くは彼志
人形をききそのはあめぬねあまきとあまき元朝よぬねお

うき起出たりよも人遊やあまき六真徳の中よ飛入るあまき後
とえよあまきあまきあまき元日はあまきあまき人形をこのあまき
糞の中よあまきあまきあまき

葭灰ヤヒ 飛トビ 立タテ 葭の日何の葭の灰を律の籠よとあまきあまきあまきあまき

春盤ハコ・生菜ハコ 春のあまきの李都とあまき人根芹あまきを菜盤

春燕ハコをいさむく 後燕ともあまき唐土よ燕をつらりあまき

初子ハコの日 子の日ハコはあまき子の日ハコはあまき子のあまきあまきあまきあまき

子日遊 大松あまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまき

小松曳 日の影を落つてあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまき

翠岷ハコ 翠岷ハコ 翠岷ハコ

磯菜摘

蘿蔔

福涌

福涌圓和徳七々子の加印を修り予く此のしと云是福也
餅の是なるあり其ありしと福引とて餅を二ヶ
引りしとて餅を和して熱するあり歌六七々子のありしと
しとて餅を和して熱するあり歌六七々子のありしと
しとて餅を和して熱するあり歌六七々子のありしと

初寅参・番卸

上のとらけ日駒馬よなるりあり七申りしと
まよとて鑑石を入せり上より細繩よとさけり
しとて餅を和して熱するあり歌六七々子のありしと

初寅や院くらり雪をり
初寅や院くらり雪をり
初寅や院くらり雪をり
初寅や院くらり雪をり

番卸

換投も実毎々や番あり
換投も実毎々や番あり
換投も実毎々や番あり
換投も実毎々や番あり

初卯

年初卯の日往古神社は法をせを初卯法といふ今日
社中におある神符を法人の法人はとらけを卯の
札といふ今世に戸鹿戸天満宮社内は物義の宮あり同く
群集まを卯の神符をせし二箇の卯も法符なり

愛宕寺天狗宴

二日強指あきを
二日強指あきを
二日強指あきを
二日強指あきを

卯杖

公・卯杖・沖杖正月上の卯杖日名をのまを五尺三寸
よきうて二東三東よゆひておわや希よなるを沖杖といふ
源よきうて二東三東よゆひておわや希よなるを沖杖といふ
より内意よりなるものをより三光境及び内儀あり今の世は卯杖
在るよきうて二東三東よゆひておわや希よなるを沖杖といふ
をより二東三東よゆひておわや希よなるを沖杖といふ

いふあしきとてしる
以上 贈

ニクウダイキヤウ
二宮大饗

忍らふよよ子代の坂城まや御杖り形
二日あり二宮と上皇宮中之西予之王殿以下二宮より
了ぬ程はてて饗又つくとりあり

ナクキ
朝覲行幸

二日あり西寺ハ天子の幸始上皇母后の宮へ行幸あり
幸あり 公朝覲の字 禮より

臨時客

中より
軍訓

二日あり攝政関白家ハ毒の始又大居以下の上達殿を揃て
遊しあふ子ののち之定むる公勢よりわたりハ臨時客と
採影を無よ更まや臨時客 結
降らせしきき雪ハ海を臨阿有 芳州
ふる雪を無よせ居りまへ 京 仙月

三ケ日

二ケ日より三ケ日 峰より月 梅笠

思ふよりあまねハ雪 二ケ日 一室

けしき日よあまねやま 三ケ日 園山

雪あしき 雪あしき 三ケ日 木雪

いふうやえ

贈 十瘡茶膏元日の清葉ハ三ケ日あり ぬりてさき

名指しつきて清葉茶膏再のうらよ付らるるを 公たうやく
いふやのうらやの膏やハ雪より雪あまねやと云ふなり
延よ子瘡茶膏

御慶

改年の西葉
あり

雪あしき人むらあまね ぬりてさき
雪あしきを志わよいおくは雪うれ 氷雪

履端之慶

元日よ人を契
まのあはれあり

覆新之慶

あはれも正月よ書を契
人を契するあり

叙位

五日或六日法臣の年勞を奉り位を
次身よ叙するあり

白馬郎會

七日何をむすの
せち

御弓奏

名註 正月七日の節會白馬郎會と云まを何の事か
タナラシク畧訓し和琴のさくさくんと云其奉味昔ハ弓六弦を
あはれし和琴のさくさくんと云まハタナラシク畧つと

壺井義永十三年

七日正月

贈 今の世はハタカを子の目して茶菜美を用ひ侍るあり
蒲葺の正月七日縁七種の菓を美しとて心ハ人万病はし

大つ
みや

人日

七日より一日を猪と二日を狗と三日を豕四日羊五日牛
六日馬七日を人とするゆり

人の日も世よまのあはれ奉り
為山

はるあはれ先人の日もるよ奉り
三光

あはれ日能為あはれ門田の如
山子

人の日能人をゆまののあはれあり
仙月

人能日や傍りもつりよ奉り
志存

靈辰

七日あり
昔云ぬり
菜摘川神事
七日志能縁年の
神あり

御齋會

八日六極取より十四日迄七日能縁王經を讀せり
奉り祈りしあり

真言院御修法

八日宿直人徒
奉り祈りしあり
あはれも今年
奉り祈りしあり

修する後七日の正修法と云はるなり
真言院ハ禁中より

大元師法

師の字をいふは例に
八日法親省より七ケ日迄を行す

女叙位

八日女の位階を叙せしむる事
内侍司の被官より
公 八日女の位階を叙せしむる事
内侍司の被官より
ありおせハ三つ子を利はらるる也
三つ子ハ天子のちりあるは統子
侍るもあり毎年ヤ文を出して
五位のくくあをたすやあり
若かり紀朝臣重明と
同一名をお傳ふ云云

女王祿を賜

女の字不儀云云
八日参儀并史と承明門の内
の史より女王は祿を給ふ事あり
公

常陸帶神事

十日常陸國若島神社の祭の日
女帯さう人同
くくく其男の文より布の帯より
素集て神およ
置は中の中より
常を又て女のうけ帯の
きつて別帯常のぬいの男と
帯くくあり

このくまふりいつら
帯は出で常陸帯

芳叶

思ふより書も神もや
常陸帯

葉雅

文字あきハ何を給ひよ
常陸帯

鳳眠

かいはしきなり
帯

有隣

夷祭

十日西のまより
今日大坂今宮の社より
帯りさへる

おさしきなり
十日夷のさきより

菜史

おさしきなり
十日夷より
帯り

雙岳

おさしきなり
十日夷のさきより
連

氷壺

縣召の除目

十一日より十三日迄
三日と云々
縣田舎の事あり
外國の人をめりて
任官をさる事あり
計ハの事あり
つぎつぎと
法は
任官を
せしむる事あり
公

上元日

十五日の予ありとありあり
ありひ灯籠を又とありあり
大つねを虫にふて後頁を付
志山を志るよりあり

綱曳

綱曳や籠より足の子卦る 古箕山

綱曳の雪より踏むむをり 上由儀

つふ曳や是のく先い隣り町 出雪山

御薪

十五日志せ八百官志しくく薪を
志るよりあり 公

御薪よ志せし美ひの志あえり 樹石

こかよ木や籠よりり 佳音

粥の木・粥杖

十五日志せし志をり 女の志 を新杖
ふせりり 志せりり 志せりり 志せりり 志せりり

と云り 枕よの志 枕よの志 枕よの志 枕よの志 枕よの志

粥杖

粥杖やうたせり 古完来

粥杖や然のく 静吏

粥杖や隣へ 出雪山

小豆粥祝ふ

十五日粥のき 天物を 公

小豆粥 波吟

平岡の御粥

十五日内園 志を 志を 志を 志を 志を

獅子頭の神事

十六日 志を 志を 志を 志を 志を

賭弓

十八日 志を 志を 志を 志を 志を

けむい後の方より舞出を奏す大方近衛の管領お世のり累て後
大御村より後をまよふお世をさへりけりいふあり

賄ふは鼻志のめりや酒ききしむ 下分賞

徳弓に志ししやあまの世をさむ 茶 瓢

敷入 十六日主人おとる人ぬきまて古の帰り父母兄弟就敷
の男面しき出遊ふあり

敷入やせついついけらうらぬ 古 其角

やふ入や日さうり 古 男あり 等哉

敷入やまき後あり 古 京池

厄神祭 十九日・蕪民将来 お世の情の厄神の宮へ詣蕪民お世
の礼を求りしあり神代より厄大

王蕪民の情を得まひて汝の子孫永く災難を免るるし
まへるお蕪民お世の子孫と云れをの希ものあり

兼あきや蕪民お世後 後 甘茶

具足の鏡割 二十日今廿一日具足のをちを
あきる元日あり

廿日團子 世傳今日を廿日
正月とあり

正月も廿日もありて蕪産の形 古 嵐雪

煎餅を繫・天穿 テラセシ
をちありお世の信正月廿日お世より煮餅
を繫て屋の上におく是を天せん云ふあり

伊都岐島祭 下の美の日官祭あり
近代お世云ふ・吉田清枝 十九日
女節あり

内宴 廿日仁壽殿よりけりる文人影をまてり病をつてし所
前より後やふありありあり

外記の政始 古月をさし外紀の恒例臨時の政をさしけりありあり
正月よりあつあまの政をけりしありありあり

御忌 廿五日法橋上人の忌日より十九日より廿五日まで
法事あり

福壽くらき

出た後の年よふちの
人あまよそねと志を
元日まよふ
とらり

氷を
維岳

俗へまゝる瘡のそらや福寿州

冬屋
而石

暖つゝく冷中もそえそそく壽くらき

氷
漢唐

氣さへふそく通る福壽州

上浦
惺惺

却もそそくおろふ鉄や福壽子

大坂
有隙

若もそ何せいつまもそく壽州

下カ
赤屋

産石の若もまゝそそく壽風

下カ
十條

東風

初東風やそそくそそくぬおのそ

産産

初東風や結人たそく消去とそ

上カ
青圃

氷流

何のそそくそそく氷のそそくそそり

由之

あのをそそく氷よおくや鱈の影

上カ
霞影

氷浮

毎雪そそくそそく葉こそそく氷うく

古
惟子

そそくはよ浮出そそく岸の氷うり

上カ
俄友

人そそくそそく何る日あり氷うく

新南

凍解

氷うりそそくそそく
氷うりそそくそそくそそく

ゆりそそくそそくそそく

凍と雪を草より汲るを清水の露 為

氷をへけるは雪の影を雪あり 古 雨 塘

風のぬく氷はたてるに紫うねり 古 幻 舟

・水のひま・魚氷よのねる 月 立雪の五日の候より

雪解 細中やまを掃上へ雪をける 山 方

雪をける雪の影を雪あり 古 藁 屋

雪を掃くは雪の影を雪あり 古 梅 笠

雪間 雪のき物たるのりたる雪をる 古 五 浪

花雪をるは雪の影を雪あり 古 梅 笠

残雪 消残る雪の影を雪あり 古 七 朗

雪を掃くは雪の影を雪あり 古 不 深

雪解水 山の山雪を雪の水を雪あり 古 氷 壺

雪消 雪消るは雪の影を雪あり 古 樹 石

雪の絶間 雪のぬくは雪の影を雪あり 古 佳 音

雪霏 雪のぬくは雪の影を雪あり 古 氷 壺

雪をる 雪のぬくは雪の影を雪あり 古 招 字

旅人の新のらるる雪を雪あり 古 草 史

泡雪

谷軒一々初雪のまじりや雪ふりて

氷七堂

淡雪や降るふりもはゆるしをれ

古 黍 菜

淡雪や消つてくゞふ又去るし

指 山

はら雪や細き江戸のをふせぬ

為 山

淡雪のふりゆくをみる底うみ

香 芸

春の雪

あきの粧ふまきや春の雪

遠に 社 水

積のしらくくしとやまゝの雪

見 外

雪忘る・雨水の節

正月の中
あり

瀬魚を月祭る

瀬のまきふりし魚り推る春

出羽 津 風

木の芽

寐忘るるの河とよ木の芽ふく

橋 水

まのんつゝはらぬの木のゆれ

古 宿 泊 子

下 崩

雪の戸や朽子竹もをえ出る

古 乙 二

蒸猫は喚びてくる磯の子

古 成 美

鶯菜

鶯の鳴飛は貝刻
生る小葉あり

雪菜のまきとそりし

雪 菜

水入菜

津波の近郊畦田に水を流してはる
まをる水入菜とすあり

是れは市のやうなり水入菜

合 里 水

和のききるを言わしむる入葉 水産

さふあつま

八 さいふあつまの州の名に異 子の魚名又子名をいひしむるい
の序抜てお説用ゆへにさし置 藻 若くまきしむる竹の名あり

滑田 若州

それよる雨の恵もやまのつま 漁藻

おーあのおさく 種やまのつま 帯崎

若草

・新子・幼州・若草
或二月もさく

若州や 松葉ま 若さうらふ若 龜持

若のらるのさうらふ若 若 だの女

若州よさふ風もはる若中 下 十條

野老

若提山

若州やるよあさく 挿 除り 香芸

武藏若も今若州の垣根も 若 椿

山寺のつあさき若よ 建老 堀 翁

山車と若也了ら若る 聖きりれ 花 海

さる度よ若さきけの若也り 水 産

瞿子粟 若葉

〔本〕藻蒿一名我蒿小蒿はれく宿根苗子よ先立二月産
を産し 若さき若り 〔農〕鶏兎勝もあ葉のさうらふあり

藻蒿はれく夫 若さき若り 若の若やまらんとり

古州の若よ若さき若さき 世 負

梅をせるその何とそ娘うたひき △花 花外

清むらさきいづのやうなるや藻苔 波路

世六つう六勝の帯よありそ娘の秋 樹石

めとまに強つ首ちつらめうそ娘 拙誠

梅をさするもきまうや藻苔 氷壺

眼をみればそらふまをる藻のたう △花 氷即

世を来よもあうそめてくそまの壺 △壺 元由

梅

梅の壺 △壺
梅の壺

この花・美の帯子・白し叶・長安貝州・白梅・赤梅
・残梅・繪梅・行幸梅・信濃梅・好文木・らめりま
朝の梅影ハ隣へくれそ〜ぬ △壺 塞馬

清むらさきいづのやうなるや藻苔 △壺 梅の壺、完伍

眼をみればそらふまをる藻のたう △壺 一止

めとまに強つ首ちつらめうそ娘 △壺 花曉子

梅をさするもきまうや藻苔 △壺 生契

世六つう六勝の帯よありそ娘の秋 △壺 墨芳

めとまに強つ首ちつらめうそ娘 △壺 墨芳

梅をさするもきまうや藻苔 △壺 墨芳

世六つう六勝の帯よありそ娘の秋 △壺 墨芳

めとまに強つ首ちつらめうそ娘 △壺 墨芳

梅をさするもきまうや藻苔 △壺 墨芳

世六つう六勝の帯よありそ娘の秋 △壺 墨芳

めとまに強つ首ちつらめうそ娘 △壺 墨芳

梅をさするもきまうや藻苔 △壺 墨芳

世六つう六勝の帯よありそ娘の秋 △壺 墨芳

柳

寤迄未雜木叢あり梅の花 越后 扇守
 うめ折る花活々として枝を 其の 何れを
 梅咲や梅井 伐と叢の中 △セシ 里玉
 木の石能雪ふりあせさう東の △セシ 我
 月と梅いふく春の布きり 下元 談之
 月より枝まら清し新の梅 △年 井紫
 何れも花凍も消ぬより △年 梅飛
 ・青柳・青やあき・川・青・風見柳・川をい柳・玉柳
 ・川をい青・まらう青・川の青・青まら柳・あふ青
 引よせそをいりうひらる柳の形 △年 大草

氷魚くくも居るま柳の世と海 △年 寥松
 菴の名くまらるるま青うれ △年 祐之
 水くく影青流るやあき青 △年 樂山
 花もあき青や人のこまて河を △年 左傳
 花より影のりらるるま柳うれ △年 文志
 一はもらるる花あき青うれ △年 木箱
 花より影のりらるるま柳の目 △年 香芸
 一はもらるるまあき青のまぬ青 △年 布衣
 物より布もあき青居るの柳うれ △年 薫信

梅柳

青^{アヲ} 茨^{カラシ}

小紅やうのふれ日うの泣ふ柳うれ 蘇^ソ 雄^ユ
 静さの何よりよ伸の柳 小^コ 葉^ハ 平^ヘ 市^シ 結^{ケツ}
 枝うりも掛らさよあめさ 表^ヒ 小^コ 晴^ハ 河^カ
 うつせ出さうえ何帯えんりまを柳小 小^コ 江^カ 三^ミ
 来と来も日の和うこのまを梅やあき 上^ウ 毛^モ 常^{ジョウ} 晴^ハ
 水^{ミヅ} 亭^{テイ} のさうむせ川やうめ森 上^ウ 毛^モ 葉^ハ 外^{ガイ}
 和^ワ 加^カ 良^{リョウ} 之^シ 終^{シュウ} 芥^{カイ} 子^シ と書^{カキ} 根^ネ 柳^{リウ} うてを辛^シ く茶^{チャ} のり^リ 口^コ
 鼻^{ハナ} の葉^ハ を通^{トウ} ち花^{ハナ} と心^{ココロ} や葉^ハ 毛^モ 有^{アル} 三^ミ 月^{ゲツ} 葉^ハ ををひく
 柳^{リウ} うつせの葉^ハ もあし 表^ヒ のはし 水^{ミヅ} 亭^{テイ}
 品^{ヒン} のね 表^ヒ 漢^{カン} 一^{イチ} 風^{フウ} 味^ミ や青^{アヲ} 芥^{カイ} 水^{ミヅ} 亭^{テイ}

鶯

・白^{シロ}い鳥^{トリ} ・青^{アヲ}衣^イ鳥^{トリ} ・経^{キョウ}い鳥^{トリ} ・歌^カうみ鳥^{トリ}
 ・黄^{ワウ}鸚^{イン} ・黄^{ワウ}鳥^{トリ}

鶯^ウ や茶^{チャ} の木^キ ともけの落^{ラク} 月^{ゲツ} 夜^ヤ 古^コ 丈^{ジョウ} 草^{ソウ}
 葉^ハ 桐^{トウ} へしやう 黄^{ワウ} 鳥^{トリ} のもら 世^セ 々^{ゾク} 山^{サン}
 黄^{ワウ} 衣^イ や 衣^イ よるもく 柳^{リウ} のあてう 鳥^{トリ} 水^{ミヅ}
 うつせもや青^{アヲ} の遠^{エン} ををく 庭^{テイ} つき 鳥^{トリ} 蘭^{ラン} 山^{サン}
 鶯^ウ の初^{ハツ} 春^{チュウ} よめ 鳥^{トリ} のすま 一^{イチ} 里^リ 玉^{ジュウ}
 年^{ネン} の甲^{カウ} き 日^{ニチ} や 鶯^ウ のすま 一^{イチ} 下^ゲ 毛^モ 子^シ 真^{シン}
 字^ジ のおまをや木^キ 樵^{セウ} のあてう 春^{チュウ} のり 柳^{リウ} 風^{フウ}
 黄^{ワウ} 鳥^{トリ} のあてう 一^{イチ} 鳥^{トリ} のり 両^{リョウ} 鳥^{トリ} のあてう 了^{リョウ} 知^チ

昔の遠きや	昔の遠きや	昔の遠きや	昔の遠きや	昔の遠きや	昔の遠きや	昔の遠きや	昔の遠きや	昔の遠きや	昔の遠きや
まの	まの	まの	まの	まの	まの	まの	まの	まの	まの
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳

佐保姫

[年] 佐保山の家の名もいふかきくまを降る神といふかきくま
神徳もいふかきくま或は佐保といふ阿をまかり蒼の字ありて有
[獲] 多木の獲生まきて毒草をまきくま神あり或はまきくま年佐
神の二名といふかきくま阿をまかり神徳もいふかきくま別々
神徳あり佐保姫八神
紙よりかきくま

山笑

まの	まの	まの	まの	まの	まの	まの	まの	まの	まの
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳

[年] 泰山漢法よりいふかきくま夏山蒼翠よりいふかきくま
うまきくま画紙の初より山笑ふをまきの香よりいふかきくま

水温

花咲くよはをきれも山もぬ
水陰の石よおちつくぬこりれ
知のよまき氷をえよふぬむ

今
俄友

帰風

一鶴

長閑

長閑さやゆめ鳥のこえを
寐あたらや宵の光采をるの音
何れよよあや夜あきの月影

下
十條

産衣

彼静

麗暖

麗よ清おこのよふ葉この那
うらこのやんのおれ樹登あり

古
木葉

氷壺

河返

神鳴るやむく雪の河うへ

古
去來

凍返
餘寒

日のうちやあらんまきそ河返
暮あ雨のよけそえこの人果
清戸畑や梅はちりたよ凍る
岩の戸能古塔もまの余寒は

今
梅月

未精

甘茶

甘志

岩
夕

三
荒高

出
唯冷

春寒

申すも春よよあやまの春よ
ゆきよあふるまの寒きう水

古
木葉

古
林六

松の花

・神皇正統記
・十三年の歌

松の花をちりや小袖の落るをり 古 渡流

こりよの雪のころもやあつたの花 十三 昇左

若松

若松やあめつちのあつたよき人 水 壺

春鶯囀

・梅うえうたふ・子日衣
・梅の音哀・音哀・音純
・柳の哀

葩煎

表仲郎右侍集よ云糶飯を 釜中よ煮るよあをを字書
名つてあつた日をもまきり蓬葉よまよるよあつた今世

ハ白米を
用ひあり

口よあつた葩煮のころもや海の後 水 壺

山楸の皮

辛皮ころも
りふ

うらばよき毛や船ハと成るも 新 類

百千鳥

百千鳥の歌をよみし百千鳥の歌をよみし 百千鳥の歌をよみし 百千鳥の歌をよみし

鷗頭をよみし百千鳥の歌をよみし 鷗頭をよみし 鷗頭をよみし 鷗頭をよみし

春の宮

春の宮の歌をよみし 春の宮の歌をよみし 春の宮の歌をよみし

初霞

初霞の歌をよみし 初霞の歌をよみし 初霞の歌をよみし

舟つきては舟よあつたりしつちのまも 生 契

霞

霞の歌をよみし 霞の歌をよみし 霞の歌をよみし

汐たきのほろりよきあつた夕のまも 一七 終

あつたよきあつた山あつたあつたあつた 越 祖

白魚

まゝ通つるけし水の流り水
雨あまむ井よふまゝくせ馬うれ
積よおくつり伸しはし雲むね
白魚や氷あらまゝきり
まじりてふ魚のまじりたる魚汁
まゝ魚のころ時よはるささうり
白魚をゆつめゝゝゝ夜ゆり
お栗やむもとりのおつゆの利
老の汲むものをのりあふを魚汁
斜
山子
水
帰
松
君
分
正
斜
湖

春の鳥

あゝ魚のやゝゝゝや雨あまむ
春の鳥の日にあふるまゝの鳥
尾のよゝゝゝ影やまゝの鳥
病よあつゝ病よあつゝまゝの鳥
鐘つゝあまの思ふ日くぬり
り燈よむのあつゝおのり日ぬり
あまの目やいそやゝゝまゝの鳥
あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

永日

あゝ魚のやゝゝゝや雨あまむ
春の鳥の日にあふるまゝの鳥
尾のよゝゝゝ影やまゝの鳥
病よあつゝ病よあつゝまゝの鳥
鐘つゝあまの思ふ日くぬり
り燈よむのあつゝおのり日ぬり
あまの目やいそやゝゝまゝの鳥
あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

遅き日

春遅き日 四の目とてく 藤子殿

菊

春遅き日 空もくもく 春遅き日

上井 由儀

町入の道能くつせき 春あそび

吳城

春雨

津川のみも 湯さけ 春の雨

松久雄

とまき 見ゆる 庭燈籠 や 春の雨

上毛 心星

春風

知んく や 浪をばあそぶ 春の風

西馬

物六 春のまき 持りし 春のうせ

能 田久

春のせき や 紫耀 富の玉いかり

貞史

風光

春の風光 春のまき 春のうせ

漁藤

春の水

春の水 春のうせ 春のうせ

尋岳

春の水 春のうせ 春のうせ

清水

春の水 春のうせ 春のうせ

智秋

海苔

海苔のうせ 川や 海苔のうせ

龜稱

海苔のうせ や 海苔のうせ

雨村

海苔のうせ や 海苔のうせ

石月

海苔のうせ や 海苔のうせ

栴石

蜆

海雲 海雲のうせ

湖立

蛤	蛤やりのつとめをさし 為心	得風
浅利	家ころもよ敷のつとめを謝と重	古白粧
鱒	鯛鯉のうへまを 鱒のまへりう水	葉雅
	陸つまのまへまきくろりの鱒や	波瑠
青鰻	庖丁のまへりうの鱒のう水	拙誠
若和布	青鰻や取合せのまき白ひりの	葉雅
鹿尾藻	和布を刈色まきくむうのまきとれハ	古葉雅
	舟鏡の鏡よのまきしりまきくれ	下毛 若葉
鮒鱈・初鮒・干鱈・目刺		

月

知りしき・梅見月・上草生月・仲春・夾袴・如月・冷月
 陽中・正月のつとめをさしとは月まえのりて衣を更まき
 くらまをさしとは月まき (興) 其希は太皞を神は句芒神は太皞
 又神は句芒神は太皞

衣更著	花の候よまきしき二月う水	古友考
	花の梅みちり陳まき二月ま	古尚白
	知りしきや巨魁の縁を指し	古葉雅
中和節	ぬ月や汗よのりま浪のお	下毛 登統
初午	初午や凍屋の門のつとめ	古葉雅
	初午や噴まの妙よ風のそ	古葉雅

東福寺懺法

惠日山東福寺法の東南より初午の日方よりかいて燈籠
馬の姿の觀世音と十二幅の像を掲げ懺法を行はせり

水間寺初午詣

和泉の國より本寺正觀音を此日出をもくふりの四十
二尊の石燈を道邊に福壽を祈るなり

摩耶參

佛母摩耶山切利天王寺松州鬼系神畑系村の山上より初
午の日を詣りて法人群をふるまは日近山の人もつらゆるの

多難を祈るとて馬を引けあせり昆布を焼く
本寺の天竺佛母の十一面觀音を奉り

身のつらき馬を引けあせり

昆布を焼く

獻生子

カシスセイシ
二月十日よまき徳は百穀瓜李の菓種を入
るおくるをせり

釋奠

釋菜二月上の丁の日大宰寮より孔子五十粒の穀を
ふるまふりおきまふりともくあり

のねつらき馬を引けあせり昆布を焼く

身のつらき馬を引けあせり

事納

梅のつらき馬を引けあせり

昆布を焼く

本妙寺參

初午の日
春日祭 上の申日比良系の日近岡中物
使もまぶりの内侍向ふ中一車り

大原野祭

上の申日大原の春日祭あり

祈年祭

四日よりあひの祭りまむ之を神名目ト云ふ百二十二尊の神を
ふりおきりあせりせむしをまむしをいのらせりあせり

祇園八講

八日あり

列見

十一日公暇より納言外記史家と初は花をさきりて大原
より初より公よりあり六位以下の藝終りそのをえりしり

或初兵部の二省より玉きあてりあせり上ゆめ
をえりゆ急列見よりいふと

列見やさうらの花も白き

拙味

列見やさうらの花も白き

露草

吉野餅配

又餅前より二月節日孫王権現へ傳へる鏡を破
碎し多くの人を驚かし又餅を奉り今日本生
まの御事法人はわくおぼせ又吉野山中の
僧侶も跡らさくさくあり

餅のまきや皆山坂よみ

尾岳

餅のまきや皆山坂よみ

尾岳

薪ノ能

滑芝能より云南都興福寺より七日より十三日迄あり七日の間
雨降せし十四日迄時より上物の薪の余を箱火より手水
屋の内にて積束を施す由急又薪の能といふ金春親世實生す別回
堂の業を在り来武より南都休暇の由生動

二日目の能は焚き火の舞

思齋

二月堂の行ひ

南都より水邊まであり

遺教經

佛涅槃に入すんしは經を説き世(世)よりあり九日
より十五日迄北地釈迦を説き世(世)よりあり九日
を説きあり(徒)子あり
釈迦を佛より説き

佛の別

二月の御事・三月の御事・佛・経・入・縁

涅槃

山寺や修り多しゆゆ

古撰良

涅槃を説き世の教は田より

早史記

西行忌

手玉の草をさうら西行忌

六燈風

月のひかりをさうら西行忌

生月

嵯峨挂炬

十五日・興福寺常樂會(摺)十五日

積塔

二月十六日石塔其の事〔通〕有人名法聚座是集也光孝天皇の皇子雨夜の御子積塔會を催す〔滑〕滑山世絶す其の又都鄙遠近の官有は云々信了官位をさしむるを政向當之〔書〕又仰り乙言

石塔や形目多あり衣 障り 芳竹
石塔會豆高の名出語りけり下廿有 障

春分節
社日

〔滑〕是月二月の中なる節也〔時〕時正なる節なり
春分のお後と追々七日の日也或は春の後日五成日と云は
まの節と云はくは神をまつる日あり〔書〕又仰り乙言
は日ありと云はくは

子も寺の寺入は社日くれ 上廿 由 儀
細針の定り照りて社日くれ

臘月

年禮のおとくを安ゆ一社日くれ 渭水
身合より風呂がなる社日くれ 上 一 室
降中より國土をよむ社日くれ だのめ
おのり夜より角をくやおる月 上 子 室
わりのちあきと室の志する月 以
きぬくし門川きり 徳 月 良 月
家らのよむとをいふありぬおる月 左 月 白 月

洛顰酒

〔海〕社日の酒をのめは耳のよきをきき
洛顰酒や禪 冥も強るも品あり 上 不 由

治神酒を飲さくてもあらふまき 花酒

治神酒のきくもきくもあらふまき 市笠

治神酒やまの暇ようのむねき 風竹

治神酒やまの宴合の仲あ入 五月昇

治神酒の果や識のふまのそり 子壽

社翁雨

提社の神舊水を食せざる社日必雨を乞ひ是を
社翁の雨といふなり 禹社の神ハ辰土とも勾龍氏ともいふ
共工氏の子あり水土を争ひ争つる故に社を雨つたり木を植て
社をせり夏は松殿より栢周の代より栗と備法より河王者を
の土を封し社を候を
建より河に上増

若くは社翁の雨はあつた水 梅屋

しんじくは降る晴る社翁の日 下井 米野

社翁の雨のま 早コ 栗屋

圓宗寺寂勝會

十九日より廿五日まで
延久五年の始る云々

天王寺聖靈會

廿二日聖徳太子の御忌日より天王寺まで
あり終日俗人の舞あり

北野の御忌日

大正日天満天神の御忌日より吉野院まで
あり菅原氏の入新ふ云々 公

季ノ御讀経

或三月中宗より大樂まで
おまはひあり

二日灸 隣りも志ぬ形あり 二日灸 帰風

上りの雨のまれり 二日灸 ムツ 宮

出代

二月八日ある度あり八月を後の出代と云は出代若江や
二月二日を期し世より寛文八年仲より三月首まで

はるより編... 城居... 二月は一統國は物...
あまの... 名... けり

足この事も... 足代の日教... 具外

出代のお... 門の海... 燈

彼岸時正

檀あまの... 都... 八月... 名... 七日... 時... 中...

踏... 足... 彼岸... 為山

教... 極... せ... 燈

芝居

二の替

二の替... 芝居... 下... 尻

二の... 芝居... 昇

振... 芝居... 松

皆... 芝居... 酒

皆... 芝居... 甘

蛇... 穴... 出... 主... 出

鷹... 化... 鳩... 月... 出

鷹... 化... 雀... 羽... 友

鳥... の... 巢... 下... 明

鳥... の... 巢... 古... 明

鳥の古巢

鳩らきまの兄やまの古巢

叙之

鳥轉

嘯のまのうまのうまのうま

翠華

雉子

雉子野鷲漢の長尾の雉を雉と云ふは律を

此をいふまのうまのうまのうま

菖山子

羽の雉もふまのうまのうまのうま

殊重

あつた雉子や粒糸の夕陽

唯月

あつた雉子や粒糸の夕陽

漁藻

聞まゝ鳥

雉子野鷲漢の長尾の雉を雉と云ふは律を

春四十四

雉子野鷲漢の長尾の雉を雉と云ふは律を

泊狩

あつた雉子や粒糸の夕陽

右 鶺鴒

あつた雉子や粒糸の夕陽

右 白

朝鷹

あつた雉子や粒糸の夕陽

佳音

緬尾鷹

あつた雉子や粒糸の夕陽

あつた雉子や粒糸の夕陽

右 白

あつた雉子や粒糸の夕陽

右 白

燕

あつた雉子や粒糸の夕陽

同巢

鳥交

ことばやまよふまふ 備中 羽のしら
 むらさきまのしら 備中 羽のしら
 玄鳥や 着ひまをき 新を 舞ふ
 藝や 昭のしら 田面 城を
 新のしら まさう 小横 暮る とき
 暮れ けしやう けしやう けしやう
 又へ 居世 六つ ちん ちん ちん
 又へ ちん ちん ちん ちん ちん

歸雁

・ 雁の名跡 ・ 雁のあき
 ・ 北へゆく雁

中山外
 完結
 菅原
 熊山
 芳原
 赤雲
 柏葉

引鴨

歸るもとのしら 備中 羽のしら
 又へ ちん ちん ちん ちん ちん
 別々と思へば ちん ちん ちん
 本意は ちん ちん ちん ちん ちん
 引鴨の 濁せ 入江 水
 おろまのしら 引け 小南 水
 今も ちん ちん ちん ちん ちん
 引鴨や 命 ちん ちん ちん ちん ちん
 雀引や 命 ちん ちん ちん ちん ちん

引鶴

早 森 史
 後 釣 月
 早 植 輪
 早 田 久
 早 素 月
 早 由 良
 早 玉 清
 早 智 幽
 早 素 庄

雲雀

引鶴や春ののちをさへゆるり 舟 文里
 初き雀や形く種をわさる麦の中 一 賢外
 鶴のゆく里やうしろよ遠き山 下毛 弘測
 吹くよまうく春あき鶴の何ゆふ 一 鳳什
 ひまはらとてさきさきかき磯の鶴 一 春粹
 吹くよや草宿の鶴の引かせ 一 晴風
 ねて引鶴をよきふつ眠る鶴 下井 蓋長
 引鶴やをさへゆるりの命辭 一 貞忠
 干細のらむいづくや晴雲 正に 帆道

鶯 琴

あけを連絡うもさるや柳雲雀 一 候友
 雲のゆるゆをさるる柳よあき 一 香芸
 柳中よ流あぬ川や鶯雲雀 一 如泉
 ねまじりう一町のよまの柳 正に 柳飛
 鶯あやう山を屏風のまけ 一 新幹
 うまゆや海山のまきもあら 一 晴風
 鶯あやう名跡のおもふ雲 一 新南
 かきよさるる柳う遠くうまの 一 花外
 あまゆや下るる子尋のまの 一 芳里

駒鳥

落し角
蜂 巢

もらひ花魚のちひさき 色 真壽
 風よそく身をわくまのや 存 花 調
 はらる身をわく 付やもらひ 存 花
 影よそくや 口のほろり 存 花
 角落し 花の丹波へ 悔り あり 色 逸 調
 巢よそく 下サ 蜂やいのちも 花 碩
 蜂の巢や ちひさきを 悔り あり 存 有
 巢よそく 色 花の 存 有 雨の 蜂
 立忘る針 色 ちひさき 色 蜂の 色 ちひさき 碩
 存 有 山

蝶

蝶 飛や 巢も ちひさき 存 有 舟 唯 風
 初蝶や 萩の 芽出よ 小 一 日 衆 得
 ちひさき 蝶や 今 朝 白を 命 一 危 山 子
 蝶よそく 色 ちひさき 色 の 愛も ちひさき 色 存 有 以
 雀 飛よ 影おく 蝶の 存 ちひさき 色 衆 衆 子
 蝶 日よ ちひさき 色 の 影を ちひさき 色 存 有 結 之
 花の 存 有 存 有 存 有 存 有 存 有 存 有 存 有 存 有
 羽つちひさき 色 ちひさき 色 の 影を ちひさき 色 存 有 結 之
 蝶よそく 色 ちひさき 色 の 影を ちひさき 色 存 有 結 之
 俄 友

虫

蜥
蜴

蜥蜴やうらの虎も虎も
 春吉や舞上 蜥ぶき 水の 上
 いまの 蜥ま 向ふ 下り 是
 等心を引 出されたり 蛇の 毒
 隣子お 蛇や 蛇くき 蛇く 蛇く
 夜上りの 目初ま 蛇を 蛇の 毒
 夜上りの 蛇の 夕日や 蛇の 毒
 飛石を 必ら 蛇く 蛇く 蛇く
 いまきり 蛇や 蛇く 蛇く 蛇く

手 古葉
手 葉葉子
下 碩
手 文里
手 草花
手 古

地
虫出

蛙

それらふらうらうらうらうら
 まくまこれまくま 凄まじく けさ
 蛇くま 蛇を 蛇く 蛇く 蛇く
 釣あま 蛇く 蛇く 蛇く 蛇く
 金の 蛇く 蛇く 蛇く 蛇く
 釣あま 蛇く 蛇く 蛇く 蛇く
 蛇く 蛇く 蛇く 蛇く
 蛇く 蛇く 蛇く 蛇く

手 米葉
手 米有
手 一山
手 其測
手 花調
手 鏡九

蛙の 蛇く 蛇く 蛇く 蛇く
 蛙の 蛇く 蛇く 蛇く 蛇く
 蛙の 蛇く 蛇く 蛇く 蛇く
 蛙の 蛇く 蛇く 蛇く 蛇く

手 古
手 古
手 古

此の向ふまゝの世の出来は 晴 蛙 合 落 彦
 しらつちの注連をもち移らば 蛙 彦、 善 圃
 水底のまじり紫をうのま 蛙 の 水、 圃 山
 井の底や世のまじりま 晴 の ま 圃
 晴 彦とやうに 浮る 蛙 の 水 圃
 田は晴ハとてよめあくや 幼 蛙 圃
 雲うそ十分は 晴 の ま 圃
 らしくと手足伸きや 浮 蛙 圃
 眞 彦のそこのけを 浮く 蛙 の 圃
 山

陽炎

・名通しは目物ニ名あり其意地より昇るを陽炎或ハハナキ
 後をゆるくと云升て空よりちりあき又降るを本通と云之

系遊

枯芝やまゝこゝ帯 法華の一二寸 箱
 陽美のこゝや 土とる 舟のこゝ人 の 仙
 系遊よ半の鼻 鼻とる 筆にたり 山 古
 けとあやまゝこゝ物もあき 蛙のまゝ 推 五

猫の戀

・うのやを猫・猫まゝの・猫まのつとまゝ
 ・まの猫ま

物おとよま 夢のま けぬ 男猫うれ 山 神 風
 身こそをまゝのま 浮しけのれ 猫ま 工 清 水
 名のつちをまゝのま 浮しけのれ 猫ま 花 園

うのき猫終るしひーのるまが、
人の眼をまのりやるもや一猫の長
佳音 之度

諸子魚

此水の小魚あり長二三寸を限りてを鱗よりまろりたりて是
き魚なり其性けやく事一此水佳音の肉之江西北本より
出州と云へり此魚最ま

水乃てうりやる目を浮くや諸子魚 仙月

子伸く新のやりのやうをくつみハ 合

鯛子取

・取の子之和名より大まき尾をとりを鯛と云へり
下品あり其子取の魚より後より大粒よりを聚りつゝ
取の子は南都律院に表より最ま一網より
取方を獲るるを

浅いや一網や鯛よりえぬを 山左

家うち坊髪とく申を鯛より 升巻

煙

馬刀より出二三寸より指のぬくふの貝あり又作煙と云
けり貝より出ありて中をぬくふを

足えといふをてらや馬刀の尻 拙珠

何れは海ありや杭ののゆる煙 桐左

寄居虫

波ひくき磯や寄居虫の遊むま 升巻

ひく波よりあらうりなる寄居虫は 川右橋

寄居虫のわたりたりなる寄居虫は 不二丸

田螺

うき時らうやうい付る田螺 茶山

吟うそくそくそくそくをまて田中うら丸 松眠

貝寄七の風

年二月廿日お後難波の浦出の吹風を云ありは伴津風
上流へ吹くを貝を結む天王寺聖真會供者の他花
あつて上まを子のあへ
歎きく云

貝より吹く結くう夜へうらまをむ風 甘茶
貝より吹く風や南の北もあへ 糸糸
浦波や貝吹くうせの風のや 巴雪
貝より吹く風より春風より一兵衛き 西然
貝より吹く風のやのこころを吹く志 其淵
貝より吹く風うらやぬ暑り代 五雲

初雷

初雷光月始電毒分の
未の候より

貝より吹く風やまをうらうらひのまねる 赤岳
貝より吹く風やまをよ出るをゆる 米有
貝より吹く風の勢や流のせうら波 上サ 柏葉
貝より吹く風や通るを夜もあへ 五子 月露
貝より吹く風をかきよるをせうら 葉居
初雷や雨より風の降あり 下サ 玉清
初雷やとくけりるも遠き里 ヒタ 招隣
とく雷やるもとくあき雷の空 帰身

初稻光

雨の降る時初雷をたのしみ
 初雷やまあるのあまふり
 初雷のけしきもまふ人通る
 初雷やまある地もまはる
 初雷やまある世もまはる
 初雷やまある世もまはる
 はつ雷やまある日東の候
 春のまを初雷のまのち
 初雷のまを初雷のまのち

書葉居
 海我
 風竹
 其殿
 史記
 龍友
 史記
 龍友
 史記
 龍友

八重の梅

・初梅・秋中梅・庭瑞梅・まはる梅
 ・実梅

紅梅

おとせのまを初雷のまのち
 初梅の雨よまはる
 紅梅や春の色はまはる
 初梅やまある世もまはる
 紅梅のまを初雷のまのち
 まはる梅のまを初雷のまのち
 接骨木のまを初雷のまのち

下サ 玉 碩
 湖月
 六 櫻
 曉 月
 花 海
 下サ 米 禁
 米 有

接骨木の
の巻

花を待

・初花・初さくら・後岸梅・ふもとさくら
・うしろ梅・鬼さくら・糸さくら

結花のしづくよ川のさくらを

おき宿 如 成

初花

雪の日はさくらを折る鳥

上 悠

初花や梅もさくらも

山 子

初花や梅もさくらも

鳥 山

初櫻

あゝ人のさくらを折る

完 終

さくらを折る鳥

鳥 山

飛ぶ鳥のさくらを折る

下 如 南

取花さくらを折る

鳥 山

椿

・玉つもさくら・白玉椿・いせ椿・船入椿・さくら
・二所椿・つらつら梅・各川のさくら

あゝさくらを折る

上 竹 右

あゝさくらを折る

雨 山

あゝさくらを折る

兼 周 女

あゝさくらを折る

組 組

あゝさくらを折る

鳥

あゝさくらを折る

波 路

あゝさくらを折る

完 伍

あゝさくらを折る

上 古 棠

何れも造るありし非あよぬのつきて

ハ多代種ん接し其よきのや一法 山子

片屋根よ落しきありしつるきや 山子

嘆きうよ味了らりつる接うぬ 下サ 三郎

露の芽とあひてつるや落接 イセ 五郎

垣敷一よ落せしつるき本うき 林 接水

接種一と序よせしる庭本うぬ トシ 柳重

去もあ一苗代菓よりつるる トシ 接菓

山寺や苗代菓も庭のうぬ 濁水

接木
接穂
苗代
菓

銀杏花

美一や苗代菓菓よ夕甘うき 下サ 米あり

焼野

・芝を中く・焼野の芒
・萩の焼もら
嘆きうよとん・目もあしる報書らる 下毛 菓欣

又同よむつてきき焼せうぬ 上毛 珠水

山を焼

山焼や片の布とくき種せ山 上毛 文麟

末黒芒

・其の種を焼する末よ生するをのよ焼せし
・生く・末黒芒いろをらよ
伸あつら末黒をかき芒うぬ 上毛 粉月子

何あつら末黒をききの白むか 上毛 粉月子

新あつらよ末黒の芒うぬ 上毛 粉月子

新あつらよ末黒の芒うぬ 上毛 粉月子

末黒芒
山を焼
焼野
銀杏花

種場や芒の介も塔まきくろ 花海

畑打 畑や志あひこころをきくろ 古妻村

余あま〜畑うり寺の男あ 子妻

畑焼 ・とく・とく
・たをきく

畑うり寺作まき延〜 鈴一羽 上妻干村

田 ・田をきく
・田をきく

田打 打ら帯〜日延乃又今田面うれ 一 唯風

苗代 せし〜や名二の影あ〜苗代田 為山

苗代や水にうらやせ八七落も〜 呂風

水口祭

苗代よ水もあ〜つのおのせ帯り 子 舞史
苗代よ水もあ〜つのおのせ帯り
あつのおのせ帯り

建了延〜水口帯や〜影 の 笛

縄をりや水口祭ま〜 阿 舞史

身よ入るや水口あつる 舞の 舞 下井 舞史

家あま〜水口あつる 在は〜形 下尾 舞左

水口の志〜よ〜声 舞 舞 舞

種井

水〜種井の〜文 種 旭

水の水の涌場も〜種井は、 里 旭

種池
種浸

四五割の家合と申す種井代 下サ 碩
銘と申すもあぬ種井代 下サ 米
土揚の家内出揚ふ種井代 下サ 五
後中なる代と申す種井代 下サ 一
任ふるも家のけしるも種井代 下サ 由
種池や池のふとふの水たし 下サ 梅
池のふとふ日くして種ひく 下サ 友
水の思ひぬく種を浸し 下サ 巨
目のえと病を種ふ種ひ 下サ 閑
富

麻蔴

結人をあてて種をこし 下サ 鳥
阿の知り世々種を浸し 下サ 花
庭掃や種あらし日朝 下サ 完
麻おきや都えおき 下サ 花
麻前やもき 下サ 富 鹿 下サ 酒
麻前や池のふれるを 下サ 彼
雪留るも種む 下サ 霜
獨活のまやふの雪 下サ 峰
防風や法 下サ 女

獨活

防風

枸杞

馬鬃ウマコの根は枸杞を搗せ虎下サ 儀
 善いよの根を搗ね枸杞下サ 玉碩
 枸杞根や蒼くし申る根のまへ 米有
 枸杞の葉よきまじ込る一葉きつ 方象
 枸杞搗ね根つきのまじひの 貞忠
 之の搗ねまはるるもまじくま 葉居
 枸杞の根や朝日の白く根はき 葉史
 山葵の根よ根のまじ杉葉葉 葉枝子
 おおりの根よ根のまじ杉葉葉

山葵

杉葉

草芳

馬鬃ウマコの根は枸杞を搗せ虎下サ 儀
 善いよの根を搗ね枸杞下サ 玉碩
 枸杞根や蒼くし申る根のまへ 米有
 枸杞の葉よきまじ込る一葉きつ 方象
 枸杞の搗ねまはるるもまじくま 葉居
 枸杞の根や朝日の白く根はき 葉史
 山葵の根よ根のまじ杉葉葉 葉枝子
 おおりの根よ根のまじ杉葉葉
 馬鬃ウマコの根は枸杞を搗せ虎下サ 儀
 善いよの根を搗ね枸杞下サ 玉碩
 枸杞根や蒼くし申る根のまへ 米有
 枸杞の葉よきまじ込る一葉きつ 方象
 枸杞の搗ねまはるるもまじくま 葉居
 枸杞の根や朝日の白く根はき 葉史
 山葵の根よ根のまじ杉葉葉 葉枝子
 おおりの根よ根のまじ杉葉葉

烏芋

草の若葉

馬鬃ウマコの根は枸杞を搗せ虎下サ 儀
 善いよの根を搗ね枸杞下サ 玉碩
 枸杞根や蒼くし申る根のまへ 米有
 枸杞の葉よきまじ込る一葉きつ 方象
 枸杞の搗ねまはるるもまじくま 葉居
 枸杞の根や朝日の白く根はき 葉史
 山葵の根よ根のまじ杉葉葉 葉枝子
 おおりの根よ根のまじ杉葉葉

菊の若葉

余の多きもや心の葉の多きなり

仙月

蒿の若葉

枯葉の多きもや心の葉の多きなり

祐之

萩の若葉

早の葉の多きもや心の葉の多きなり

菊

蕨

早の葉の多きもや心の葉の多きなり

不葉の多きもや心の葉の多きなり

為山

うさぎの多きもや心の葉の多きなり

仙友

狗脊

狗脊の多きもや心の葉の多きなり

唯和

明程の多きもや心の葉の多きなり

猿堂

狗脊の多きもや心の葉の多きなり

由儀

せんせいの多きもや心の葉の多きなり

古棠

狗脊の多きもや心の葉の多きなり

渭水

せんせいの多きもや心の葉の多きなり

一山

狗脊の多きもや心の葉の多きなり

子布

角組芦・芦の角・芦維

せんせいの多きもや心の葉の多きなり

佛孫

阿の角の多きもや心の葉の多きなり

智幽

信の角の多きもや心の葉の多きなり

宣英

寺の角の多きもや心の葉の多きなり

伊の山

土 華

・昔つとよ
つらのよ

水原や仲の暇よつて茅の角 子 古棠
角先ハ泥さくしえまを何の毛、 葵史
更舟よせくせつきの茅の角 下毛 優く

改もくもや 赤よをつくはくじ 山子

菊 苗・菊分る・菊植替る

ゆきあつらまゆー付くう葉の苗 十條
根とくくちる近くくちるきぬ葉の苗 一亭
花もつらぬ扱しやきくの苗 舟子

伸るくくけくもをぬ葉の苗 上毛 月昇

雨もれぬ葉の根分る 上毛 菊外

くもく日や葉の根分る ムサシ 八九雅

世もい人よせのぬ葉の根分る、 文里

蒲公英 被るやよのそほくもほく出る 古 一具

菖 川 ちきき
海 ちきき

つぎふ 菖葉を捲るのむもほし ムサシ 里 泉

若 紫

雙 紫葉の山をあり諸國あををうたて深州とて
奥州遠州孫州より多くある紫葉の苗也 古 春日神の紫葉
のきく家志のあれこれうたてて是則紫のこ紫ををい
はるるをたてしはのふ文字はるの意をてらぬりしとて

蓬 摘

野 蒜

韭

位濃路や美むらさきの中 下毛 薬飲

性よきくぬくの葉の色を染る如く、優

山よきくぬくの葉の色を染る如く、優

優くう茶の葉より通ぬ蓬つと 下サ 換草

うらさを染る如く、優 下サ 方泉

女よきくぬくの葉の色を染る如く、優

性よきくぬくの葉の色を染る如く、優

厚く染る如く、優 下 智幽

砂地へ根入の如く、優 下 不二丸

寺子等を染る如く、優 下 如水

葉を染る如く、優 下 風竹

人よきくぬくの葉の色を染る如く、優

海や山や木や草を染る如く、優 下 龍成

胡葱や海苔より、優 下 麦系

山よきくぬくの葉の色を染る如く、優 下 瑞英子

胡葱を染る如く、優 下 魚欣

草 下 牧塙

大根花 下 鼻和

辛き世を花よ出ぬ事し大根代 甘菜
糸くや寺の大根の糸よある 上中 優
大根の糸やきまきまきく通る 下サ 精中
田よ花の咲く能はれる大根うれ 実有
ついでよ志くく大根の活きまされ 下士 毅
[年] 本名祥あきまき凡二月日生し其葉三四寸中麦か苗
葉のまきく養生は女児あきまきくして髪よむきし苗は
くむのまきくしき中あきまきくく州の名はく
又むいふまきくしきあき
申あきまきくはかひしきまきくく子 嘉山子
字くの中 繁方州 くく是えく 下サ 毅 相

鬘草

鳳巾

こうきん
けり

鳥のけりくくくくくくくくく 下毛 葉 飲
見よく後のまきくくくくくくく 優く
[増] ともこのわく 蠶 其の風く下くく 秋あり 夏の風はくくくく
あきまきくく 秋あり 其のまきくくくくくく 夏はくくく けりくく 夏はく
巾 秋あり 其のまきくくくくくく 又カ川 壮 山
手えくくく 切せてまきくくく 下毛 一 海
骨まきくく 秋あり 雨よこのまき 下毛 珠 之
梅よ思くくくくくくく 春日うれ 已 随
相抱をまきくく 春日の日和く 下サ 十 條
とくくのおわふまきく 鐘をまき 下サ 毛 儀

春日
春日和
春の夜

春の宵
春の月

雨いらり雪いらりぬきぬきの宵 由之
提灯といふも居る家も春の月 西笑
名を字々又ぬ里申の春の月 尾村
まゝいつもまゝに更ぬはるの月 田鶴
えさくむる庭木の影や春の月 貴邦
春の月陰まよゆきる木こきやう乳 下元折
猿のあうもんこくくくくく月 紅林
けし磯も静あう危春の月 下津久
寝あつまる磯家のうへや春の月 菜園女

三月

・弥生・花見月・梅月・春をうく月・季春・信濃・病月
・暮律・暮春・花月・花雨とも云
ふし云云律中始まらるる春中始まらるる

弥生

三月や春の春も花見月本 古 文草
神風のやういふ御門の扉 古 去来
土の奥に志まうよのなる弥生バ 如 向
雪柳の先へ雨ふる 弥生可なり 北 柳
咲ぬ花を啼ぬるもあきやういふれ 賀 招

上巳

三日を推す巳の節くまらるる
固の候の節いあらう云云
日三月初の巳の日を上巳とて曲水の宴らう
五三月三日を以て上巳とす
魏晋以後の事あらうと有
羅今もあつて

小流せのあし上己の家やをり 不 由

連了せし流をるるり上己のれ 下サ 未 終

花をくくすきよ白ふ己に 麦 未

己の日枝

上己二月上の己の日枝迎ふてをひりて、夜病をのそく
己の日枝 己の日枝 己の日枝 己の日枝 己の日枝
を用ひて己の日を
用ひて己の日を

須磨の御枝

花もふんをこの日枝枝う事 仙 月
増 ちの老原氏源十の浦は左近の時三月朔日己の日枝陽
けふおんせきくくすきよ白ふ己に 己の日枝 己の日枝
満るまの源の流 源 十 枝 葉 雅
波ひくく源十のくくすきよ白ふ己に 水 壺

経供養

後州四天王寺太子堂の此の所は経堂なり本堂の裏
観世音三月二日経供養あり

持家りの他力者 経供養 下サ 君 枝

ふきおの流よあたりて経供養 方 水

牛馬よ信をのそきて経供養 櫻 曼

曲水宴

盆をちのちの日 けり水のくくすきよ白ふ己に
より始せり者よりよき己にちのちの流前よを 詩をけり
備せらるけり己のちのちの流前よを 詩をけり
文ノ、ちのちの流前よを 詩をけり

曲水や 欵よをちのちの流前よを 友

曲水や 衣よをちのちの流前よを 友

曲水よ 蓋せりちのちの流前よを 友

桃花の節

三日・桃の酒・白酒・蓮をもち・桃髣髴今日桃花を海よほし
てのめい百病を除き・良薬をよまむとあり〔本〕

曲のめいゆしやあつて色しき 時 柳

三子と世を従ふや代々 桃の酒 龜代女

紫より角よきゆの夜むやき 能 酒 菊紫子

目もせつくくも赤し 桃のさけ 三子 桑 史

花まもるもむてゆし 桃の酒 下 三 郎

たふく 能 人もきよき 能 酒 方 糸

よきをわしよ 能 蓮の何う 桃の酒 貞 忠

ほのつきに 禊 心きき 桃の酒 花 洲

白酒

こまきせし白酒出まきや飯の何し 上 曲 儀

白酒や二階よも子のひしき 梅 禊

草餅

〔年〕昔周の幽王淫乱群臣怒む若しぬ曲水の宴よ或人を
もちを幽王よまきしを王その味をめで 宗廟よまきし
しとのたまひあり 政 何れとありて世はし
し 十 あり

黄ちのすめを 藤つらん 竹の餅 古 嵐 雪

子をもちや 衣紋を 若きを 下 梅 左

あも何うて 色の味も 竹の餅 下 貞 忠

竹をもちの 候よ 逢へぬむき 藤 紫 子

信保のめ 能 手信ふき 竹の餅 下 梅 史

鶏合

三月三日は卯の辰春ありしりよ説ありたりとある言ふ云よ
も卯の辰春春ハ卯の辰春ありしりよ説ありたりとある言ふ云よ
云り但唐の明皇法明の帝子開務を命じ玉へり位よつぎあり
ては治新坊を命じ人五千人を遣て其世を細せぬと云り
のせり世の今も是を言ふ所ふり世ゆゑにやと傳へる朝よ
ハ来崔院天皇元年三月四日開務十歳ありし由或記に云ふは
貞元元年の雜記に定らむ後ハ春を抄
終るるのく——以上(増)

仕丁も卯を命じぬや鶏合 下サ一 亭
鶏合卯も命じぬや鶏合 古 曉 臺

手は汗を握るを卯や鶏合、玉清
年よの他法くらきけり言、名取
卯禮ハ余坊よぬむや 鶏合 古 甚 角
人よ一も年をぬ世よ鶏合を也 祐之
又も人のちのらも卯了り合 兼葉子
おももも是のも真如や鶏合 廿二 棟 堂
縁勢や若のきとて後志あり 廿三 花 洞
よあくと縁勢抱くや人の中 廿四 出 雲 坊
いさやうく卯起を言 鶏合 久 榮

おとろけ過ぎ上より一 鶉合 正言 氣儘

雜遊

増同たうちるあつはらひはあつあつのせては難なるを！
源よへ元目よの世今の朝もいはいあつあつし由をへきを

今日白くあつあつぬあつあつをこつた但しあつあつはあつあつを
すつて今日あつあつあつあつをこつた新撰大つた集うあつあつ
あつあつはあつあつし由をへきを今あつあつあつあつは三月三日を
とてあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

難あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
古言 破

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
多代女

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
葵史

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
牛文

別段よこあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

下毛 誠之

青き踏

唐の俗上巳は士女遊戯するを云ふなり又三月三日上踏を
踏と云ふ也

増 三月廿八北山灵岸寺あり其の土を奉りて
御燈を北斗に奉る

増 三日廿八北山灵岸寺あり其の土を奉りて
御燈を北斗に奉る

御燈を北斗に奉る

増 三日廿八北山灵岸寺あり其の土を奉りて
御燈を北斗に奉る

北向の燈を奉りて之を伴ふなり

藥師寺寂勝會

七日此寺天武天皇の御形と云ふや毎年七月十五日
に經を講せしむるなり

石清水臨時祭

増 中吉日南祭あり先中辰日試み有衆人并
臺のそとよりて竹枝をのぎしは仁壽殿のそと

より師ありつらありて陸後近所の石人求子と云ふ事未を合せ
あそむると云ふや南日とい大臣曰下のそとを杖持人の射は
まし二献り五献のりちのそとを杖持人の射は
門の礼のそとを杖持人の射は

初めはそとあり

鎮花祭

公 花まつめの祭と云ふ事飛のそとあり疫神
をまつるなり人をまつるを結んとめ神祇官よりけり

民を接神を崇めてそとあり

繪踏

西國より年二三月のそとあり丹波宗の老を何とめんと
めは後徳と云ふ事あり

そのそとあり

寒食

増 五月五日清明の節のそとあり或百四日
或百六日のそとあり唐土より傳へる推して云賢人火をたげ

うせ一日して三日の極火をたげたり魏武帝北方の寒國は老女の
うのそとあり魏武帝北方の寒國は老女の
と成るなり時を去りて民の希をそとあり推し
賢者のそとあり

寧食や学はすむ世のあしむる 花 海

寧食や高き世をなほさる 魚 文 魚

寧食や柳の風の清くする 我 酒 我

寧食よ清くもさるる人さる路 花 外

寧食や火を止め先葉のあし 波 烟

寧食の海へさるる向のあちりれ 岳 赤 岳

小弓引

薄 是又寧食の日且事連の戯の小弓あり只小弓引と
斗けりるちよと事連とさるるんあちり

菓のまへえはちりしつりし弓引 川 右 棧

春めきし里の遊しや小弓引 優 之

杏の粥

うすうすのかゆき食よ
用ひしりし 鄭 ちり

東の饅

ちりめいあちりもの
きさか回あ

青精飯

青精飯とはさるる食を揚相の葉をしりて飯を煮せし
まるとはさるるはるをくらひ陽葉を助く是家こくま精
乾石飯と云うま事をさる飯とも
いふさる

相 菘 民のまやりのま葉め 一 菘 古 菘 雪

鞆靴の戯

増 宋仙の戯世は心さるる食をさるる靴をさるる
架とては士女の上よせりては靴を引助うとさるる
さるる唐の天書年中は官女に食よは鞆靴の戯をさるる
多しよとさるる帯は仙の戯とのまさるる 天 一 ちり

ふらさるる根のさるる花の影る路 花 海

鞆靴やちりしちりまきそ事のひけり 崧 村 子

あちりや風のさるる心よさる 下 崧 長

鞆籠や篋いりうらふ女の子、東有
 むらさきよ人のちらやむ遊むうれ ハナ 何れ
 むらさきに昔のよき歌の持し危、乙種
 ぬらさきやうき歌心せき日ごと、石花
 鞆籠やまぢりうら喜む アキ 葉居
 むらさきや篋いりうらよ アキ 葉居
 ぬらさきや子の智恵うら アキ 葉居
 鞆籠や日ごと アキ 葉居
 むらさきや アキ 葉居

清明の節

三月の節あり 榆葉の火を給ふ是ハ寒食ノ塘火也此
 節も清明の節ハ榆折の火を取て帝より近衛ノ
 御ふりあり 唐書ハ此ノ節ハ書立あり

沙予

上り帆の淡路をうれぬ沙予 古 去来
 出づる人の品居ぬ沙予 古 去来
 人さねハ鳥も春さし 古 去来
 舟場の星船ハ遠き沙予 古 去来
 遠くやそ女もゆりぬ沙予 古 去来
 春ぬ多し 古 去来

土佐の海に硯石を取
三日夕平よ

硯石ききふくもや土佐の海

不知
仍否

蛤あし

指の先さかき突て蛤の
けらるるしりあり

あきさみは蛤あしの日あうなり

上サ由像

庭より登りて蛤あしを藁内より取り、柏を

石山祭 三日

粟津祭 三日・一乗寺祭 五日あり

水尾祭 九日・高尾の法花會 十日・泉涌寺開山忌 八日

増八日高尾は法花會やまじりよきそそく云はききこくもや
初めには瑞香しりあり

安良日花

増八日高尾は法花會やまじりよきそそく云はききこくもや
初めには瑞香しりあり

あまうしは花しりあり
あまうしり天よりあり

吉野の會式 十日・禮拜講 十三日・叡山八三寺・祇園一切經 十音

壬生念佛 十四日より廿四日迄狂言あり・桂・楠

壬生踊

結よ書しやあまのこや壬生踊

下サ 岩 次

あまのこやあまのこや壬生踊、葎長

あまのこやあまのこや壬生をり、陸兩

今風俗よあまをめしし壬生踊

息もたせしあまをみえや壬生をり、葉居

世よたぬ人もあまを壬生をり、花 海

勸學會

十五日康保年中より大内代菅原保胤狂言侍供の罪をゆるさず
さんごく文をたて達の學校をたてしめて三月九月の十五日毎子
行ひ給ふ世をくり念極楽を誓ふ一夜山月西田と紀高名の作り
りしむは會あり勸學會院ハ云々の北壬生の西今も喜の共其終あり
是る氏の子生抱學ありしや
云あり近世四葉大字の西より

梅若祭

武藏隅田川の東本母寺
つり十五日

神もも知あを梅若祭り
別せくふ又何ふ連や梅若忌
近くても一日の事や梅若忌
仙月
甘茶
花洞

嵯峨大念佛

十五日狂言あり

千本念佛

被寺のそさつり狂言

入磨祭

十八日

浅草祭

十八日に江戸浅草親世寺境内
三社の祭あり

御身拭

十九日嵯峨の縁辺の御帳ありて
御身をぬぐふあり

春のちよも歩へきむや御身拭
まむろのや御身拭
けり目も人の御身ぬぐひ
近つきの類ももぬや御身拭
よふおよ都へ出る御身ぬぐひ
子布

御影供

廿日弘法大師入定の日ちか東寺に法ありけりて高僧神
護寺仁和寺より女の供あり

御影竹や草ふきくもむの記

高雄の女詣

二月廿一日御影供修す御影よ女人の光を
仁和寺八寛平法皇の御影あり

由多し師字中
りあ

黒末うるを結七高嶺へ糸り危 尾村
古伝いのよ高嶺の白拍子 齋旌
顔の目をこららふ高嶺詣り丸 樹石
高嶺山 空を目をゆるぎて 氷壺

順の峯入

圖 毎年慈光より葛城大峰へ入吉持は出をを明の
峰といふ本山方勢く聖徳院津門をよおいて是を接校
せしむ。吉持より大峰の後へ入慈光より出をを逆の峰へと結を
山方勢く三空院津門をよおいて吉持を新なる是天台真言古伝の
意秋の母を
新なる

峰入や接あらうり橋のうへ 出八 五 峯

うの花を折らうきりう聖明の峰、 峰風

峰入や接ハ字えていさぬ連 下サ 岩 玖

い入の明くさうやりの川 年二 旧 左

峰入やえおるをさのふうら 原 交

い松入や春眉をゆるさるあり 年十 素 居

峰入やあくせぬふりもちうり 杖、 史 紹

いといくと送うと知れり出立丸 上サ 由 儀

田鼠化て鷄と成

田鼠化て鷄と成 田鼠候あり

田鼠の語よあううあの日和 下サ 蒼 長

去りり 鶉やまゝる 田の嵐 祐々
 田嵐の面々 鶉の鶉 不年
 鶉の鶉 鶉の鶉 田の嵐 下 玉傳
 田嵐まゝや 鶉まゝる 飛まゝる 上 宝船
 鶉の鶉 田嵐まゝる 鶉 上 知是
 鶉やまゝる 鶉の鶉 鶉の雨 古 白塔
 鶉の鶉や 鶉をちりりよ 生初る 下 孤眠

穀雨の節

萍生初る

三月の 鶉荷の御出 中の年ありは 秘伝は日なり
中あり 月 穀るの節は 油のハ 滋七条 南は 秘伝あり

八十八夜

生初る 鶉の鶉 日長きまゝる 春 優々
 川々の鶉の鶉 八十八夜 鶉の鶉 上 公成
 鶉の鶉も 鶉の鶉 八十八夜 鶉の鶉 下 不由
 鶉の鶉 鶉の鶉 八十八夜 鶉の鶉 上 有入
 鶉の鶉 鶉の鶉 八十八夜 鶉の鶉 下 葉飲
 鶉の鶉 鶉の鶉 八十八夜 鶉の鶉 上 文種
 鶉の鶉 鶉の鶉 八十八夜 鶉の鶉 下 以兄
 鶉の鶉 鶉の鶉 八十八夜 鶉の鶉 下 玉傳

忘霜

暮の春

初春わくふりもくえんはむききき
只あしぬたふりもふきのふれき
常無ふりもむきききききききき
上心星 三月月

・夏を精・暮の限り・暮の名跡・暮のこころ・暮のこころ
・三月暮・暮備り・暮は遠き也

行春

白しつる春もむききききききき
筒子の音もむきききききききき
行もむきききききききききき
ゆきききききききききききき
りきききききききききききき
古葛三 古小圃 古葛村 古山

春七十四

夏近

りきききききききききききき
りきききききききききききき
申きききききききききききき
りきききききききききききき
行きききききききききききき
申きききききききききききき
夏ちりりきききききききき
葉雅子 一井

春惜

夏ちりし先中夜の暮のこゝ
 魚の身もあはれなる夏ちりし
 おもむきも梅も春も夏ちりし
 二番葉も存子もさへあつた
 友ちりしもあつた相油くれ
 夏ちりし節もあつた餅の味
 じつとふ菜の料理も夏際
 昇る日もあつたあつた夏惜也
 産物もあつたあつたあつた

東橋
 史記
 古棠
 共其仙
 古水竹
 榮雅子
 小川

爐塞

春を今俄よそむ名残る春
 芽のそとら牡丹もあつた春惜也
 春を今もあつたあつたあつた
 舟もあつたあつたあつた
 咲きよもあつたあつたあつた
 春を今もあつたあつたあつた
 春を今もあつたあつたあつた
 春を今もあつたあつたあつた
 春を今もあつたあつたあつた

心星
 玉頌
 唯風
 由儀
 家新
 来史
 閑富
 一序
 智幽

鷹の巢

野塞やそこの峰もきのふ草ふ
 煙塞々小札中々ふふ
 ふふの炉を塞々おまひの金は出人
 炸ふふたやとつた子へおの志は
 南きや塞々炉もあてりんる
 まうくくおのまうくする巢鷹うれ
 鷹の巢や峰よりあつた風の筋
 ねくくりの地をけふる巢鷹ふ
 鷹の巢く字く人らも、指く水
 家新
 懐父
 由儀
 花海
 柳葉
 呂舟
 一歌
 峰
 巢欣

鶉の巢

鷹の巢や本をも裏日の照くも
 鶉の根岸ときけと鶉の巢
 青の州くさくさてくえんを鶉の巢
 優
 巢欣



郭公の巢

巢のうらへ何れ鶉のそ郭公
 むきく巢のまきく山を鶉の巢
 巢欣
 柳佳

雲ニ入鳥

増暮まきり朗詠の相
名のとくまらまら

鳥をまき入る州本のせうり
 鳥をまき入る日や山のくまらまき
 鳥をまき入るやあまの精入まき
 古閑更
 柴松子
 巨月

しるし... 魚 令

... 魚 山 姑

小 鮎

... 古 前 淵

... 漢 藻

... 由 係

... 又 岳

櫻 魚

... 櫻 魚 ... 櫻 魚 ... 櫻 魚 ... 櫻 魚 ... 櫻 魚 ...

... 櫻 魚 ... 櫻 魚 ... 櫻 魚 ... 櫻 魚 ... 櫻 魚 ...

... 漢 藻

... 波 路

... 松 久

... 甘 菜

櫻鯛

真子きりきりもさくさく魚 葉瓢
 赤きほろのちや味やきり魚 杜味
 名の志をく取もききつ梅子を 下毛 葉産
 山形りのきりくちりきり魚 葉産
 ふき名をれきり浦のきり魚 優く
 赤き花の影もちりや梅魚 令
 雪水のきりきり川やきり魚 水産
 時ふ何ふ名のうきりや梅鯛 替 梅水
 旅先よりふ二度うきり鯛 下毛 梅水

櫻貝

是よりきりきりりや梅鯛の 下毛 陸両
 花の持きりきりきり鯛、 陸一
 赤ききりきりきりきり鯛、 下毛 葉産
 ころきりきりきりきり鯛、 優く
 時ふ何ふ名のうきり鯛、 下毛 陸両
 赤ききりきりきりきり貝、 下毛 陸両
 赤ききりきりきりきり貝、 下毛 陸両
 赤ききりきりきりきり貝、 下毛 陸両
 赤ききりきりきりきり貝、 下毛 陸両

飯 蛸

飯蛸やふき無めきて目の移り 在 余
 飯蛸のこぼるもつらや考うら 古 眠
 飯蛸や多野足よ返むきくま 氷 壺
 飯蛸や信河野の後野ようせし 樹 石
 紫耀めくさ小人所のこむさうめ 逸 園
 かく吏婦ひらつ症やや蟹時 滅 之
 若和布刈 折ふさきうらや和布刈 氷 壺
 素 摘 素法くや川をさきんて言へし 山 子
 素市や夜めつ歩せし引帯こけ 雙 岳

蠶

若和布刈

素 摘

春八十

挑

・挑く・挑挑・向く・逐平挑・毛りの巻・三千世草・碧挑
 ・古海古州・挑林挑の天くくく云も妻ありこもくせよあつてふ
 挑くふ西王母の園は三千草よ一巻花咲くもの挑りもさるふ云子とせ
 草しらのふもさるる姫さくハ堀の畑あり

山崎もあくや挑くく畑の奥 節 之
 ちんぼや休屋の新花流せ氷 在 雨
 挑らくはちんぼの堀の内 得 甚
 飛さくや豆降雨も泥もある 古 厚 朗
 実さくはんぼの木ありや挑のそ 嘉 山 子
 大やくふ里のふゆほやこはむ 鳥 河
 はさるもあつてさくけり挑の花 下 十 條

櫻

・花ざくら・江戸ざくら・緋桜・家桜・塔のま・うをさくら・系桜
・有明ざくら・朱桜・浅黄ざくら・人丸ざくら・西行ざくら・揚貴妃
・蹴ざくら・この尾・白ひ桜・ふぐん桜・墨染ざくら・や井桜・うづ桜
・さくら若・あけ桜・法橋寺・さくら待・たさくら・布引ざくら

ういぬをめぐつて押や桃の花 古 荻 山
桃赤しりく小きもあつてよまき 古 雲 巢
お畑く内家つきても花をまふ 寺 哉
こゝれをまき性いやき在はるれ 漢 藻
うづこの雨いそぐりては花を 四 柳
おくせのつぎもあつては桜うめ 古 白 桂
城のの相風もいそぐりては 葱 玉

八重櫻

〔年〕
八重ざくら・この尾・白ひ桜・ふぐん桜・墨染ざくら・や井桜・うづ桜
・さくら若・あけ桜・法橋寺・さくら待・たさくら・布引ざくら

雨よまて秋之末もさくらうれ 名 不 退
交る木も伸て花もく桜の葉 菅 唐
まうゆく水やさめりの下 ぬり 十 條
やまきののしるやまも桜の如 上 毛 碓 込
驚てこもあつてはさくら 暉 泉
流るるもさくらして白きさくら 峰 山
そのまきてはさくら 水 壺

信をたの上は降ふりそこの雨 古 卓池
 花をさし敷くらるのあふとまる 古 沙路
 明ぬち起る夜もけりそきり 古 公平
 菅敷がしあき花のあまうぬ い 士敷
 そちうや嵐のりけ庭のあり ま 出
 あふの帯たえを風けり内を 考 水
 せしやのうき時名ありそきり 茗 玉
 節をたてまふよぬ 分 葉
 世を捨て報くり花よつるせむ

春八十四

うの海くく人かきくんそよ我 時 風
 雪をくくくくき晴てそよ月 滅 之
 神風のまをきふさのうり水 雪 敷
 阿らうきくくくき雪敷のそ 初 の
 雪後や雪のえくそ雪のちる 業 月
 雪のまきくぬ雪のむくぬ 業 雪
 ちり込る雪のあけく井筒は 上 巻 外
 指衣の袖くく人や雪くき 秋 田 甚 仙
 まのくきよ近くく雪のあえり 葉 因 女

花の錦

〔朗〕 花の錦は御きくもたまきまはせり
おききよりききあうける定家

花の錦は御きくもたまきまはせり

佳花

花の雲

〔古〕 花の雲は御きくもたまきまはせり
とつり・人丸家集は・白雲の色の子種はとつりまはせり

そのまはせり
あうりあうり

花の雲は御きくもたまきまはせり

菊

花の雲は御きくもたまきまはせり

古隆岩

花の雲は御きくもたまきまはせり

鳥人

花の雪

〔簡〕 花の雪は御きくもたまきまはせり
ききくも雪の白雪も世

花の雪は御きくもたまきまはせり

如白

花の龍

〔筆〕 花の龍は御きくもたまきまはせり
花をのいふ云々ふきくも雪の白雪も世

白雲はせり花の龍は御きくもたまきまはせり
ききくも雪の白雪も世
よつりて花の龍は御きくもたまきまはせり
あうり

花の龍は御きくもたまきまはせり

集欣

花の龍は御きくもたまきまはせり

氷壺

梨の花

・山梨の花
・新のつぼみ

花の龍は御きくもたまきまはせり

山方

花の龍は御きくもたまきまはせり

佳花

花の龍は御きくもたまきまはせり

イの魚

海棠

・うらあ
・ゆきあ

海棠やをくせて時をさすさめ

右 草部

海棠は花屏風の土佐画の如し

草部

辛夷

・白
・白

桐ふむをよ辛夷の白さう水

右 白部

辛夷ふもあてちのきき住居は

多吟

躑躅

・岩
・山
・花
・秀

躑躅の嶽端うつる花留り水

為山

瓦山の嶽をあきへて咲ははし

上毛 心學

山吹

・云々

・款を貞徳云久末んとうふきのたうと云とと
山吹といふ 和 順ハ
山吹といふ 和 公任知も山吹といふは朝日と云ふ山吹の

山ふきやあはれハ花之主 性

為山

山吹や垣の隣ををめ住み

上毛 茶山

やまふきやを渡とて魚の如

下毛 種好

雨舎りー山吹のりえ見り所

上毛 其剛

山ふきや物よあつまぬ花の色

上毛 五葉

ねがはれまをのそは目立ちり

下毛 其剛

連翹

連翹の庭うちまきを通りけり

上毛 其剛

李の花

李の花

下毛 其剛

木瓜の花

種播了連翹を布く灰うけ里 古乙人
連翹のゆりのさきや 雨り云 十
清く増も厚くそや木瓜の花 乙良
刻目久く見きれぬ山や木瓜の花 静く
カカミ 椽 登

令法

【箋】又そつとりとも云未も増も度川つりよおそそは
名あり紀年又葉を採て蒸て合ま住候ありとあり【系】
年のとつとりとつりよおそそは
合ま住候ありとあり

山人も指やんやあそつとり 古 寮 松
山里や 旅り 河野合法飯 日向 古 塘 雨

沉丁花

里のふれ指もそそし合法うれ 葉 欣
沉丁をよよそそつとり 春の月 古 三津人
さそそそそそそそそそそ 沉丁を 米 有

木蓮花

黄葉と寺いそそそそ 木 蓮 花 花 海
懐らそそそそそそそそ 木 蓮 花 其 剛
肉伸よ上つそそ 木 蓮 花 葉 空
露持よそそそそそそ 木 蓮 花 十 條
そそそそそそそそそそ 木 蓮 花 十 條

長春

長春や 岩や 水井井の井柳 全

石楠花

日の昇る窓先ぬく〜花をむ 下サ 宋蘇 尋香

赤南をよや能きう〜花海

石楠花やまき苦め〜重文里

去南をよや春のつ〜呂風

蕪枋の花

花と名の付い〜菓欣

小米花

勢あつらん〜精中

田へ水の通す〜米哉

小手毬

小きやうや尾〜菓欣

通草花

つををんて名を知〜不二丸

日よ〜通草花 菓欣

馬酔木花

アセボノハナ 葉は冬よぬ味苦〜馬酔木花 菓欣

ハハ 酔木花 名よ

畑中よ墓を〜サ 梅左

馬酔木よ〜種生

杏子の花

両室〜杏子の花の〜佳音

林檎の花

とれ〜林檎の花を〜菓成

花の〜や咲い〜菓欣

榕の花

楊梅の花

枣の花

藤

やまぐしと咲を林橋の事うぐれ

花を中いませけりあてて橋うら

楊梅の花見えて咲き味うら

葉の伴うよそ咲るる枣花

咲枝いろそ一葉の紫のくさう

・若くは・若くは・重くは・ふちつふ・若くは
・下り若・若の丸・白ふち

本より花も陽華とまきく若のむ

若くは若き日よつてそのう若のむ

おのれに捨まきくすまうら若の花

優

菓欣

今

如白

朱有

祐

立休

十條

春八十九

葎ク葎カチ

菜の花

葎

ひよ本よりさうくもえき若うら

古よりつ日掃ものして葎の花

花部ゆきうら若くは若くは

うきやち若くは若くは葎の若

菜の花も町屋のうら若くは

若くは若くは若くは若くは

菜の花もやうむくくは若くは

・つれづれ
・葎くさ

若くは若くは若くは若くは

仙

秀

古

梅

李

柳

柳

送

若菰
茅花

若菰の穂あま〜や若菰ぬき、三郎
母や娘んつ〜ぬぬ〜子のあはれき
椀板の透目よ〜まる〜つ〜ふ〜
詠久 西馬 淡之 雨興 秀三 其糸 下分 賞

春九十

五ヶ

ハナ
形

春のつら〜一人は遠く
の一無〜

川除の穂あま〜や若菰ぬき、三郎
母や娘んつ〜ぬぬ〜子のあはれき
椀板の透目よ〜まる〜つ〜ふ〜
今押〜椀へ持あむ若菰をう〜
傍りの穂〜おを〜ぬぬ〜
〜や若菰ぬき〜もあ〜き〜
任〜菰葉を〜云〜んげ〜
〜ち遠く〜
詠久 西馬 淡之 雨興 秀三 其糸 下分 賞

陸る

春茶や夜茶の類は山 秋

新茶

園・古茶・子始め・茶摘・真茶・新茶を煮く夏に
茶摘古茶を煮く夏に茶摘古茶を煮く夏に
茶摘古茶を煮く夏に茶摘古茶を煮く夏に

茶摘

のく類は皆西日より茶摘くは 為山
の物と摘く茶摘くは 種好

摘くは茶摘くは 柳枝子

旅人の足とめくは茶摘くは 柳枝子

東菊

園茶は秋に摘くは茶摘くは 花曉る
ひくは茶摘くは 花曉る

春九十二

馬蘭

花は紫より赤なり葉は油紙の如く茶摘くは
花は紫より赤なり葉は油紙の如く茶摘くは
花は紫より赤なり葉は油紙の如く茶摘くは

化偷草

葉は車あまの如く後摘の如く元は皮を煮くは
葉は車あまの如く後摘の如く元は皮を煮くは
葉は車あまの如く後摘の如く元は皮を煮くは

金鳳花

葉は花の如くは毒を煮くは茶摘くは
葉は花の如くは毒を煮くは茶摘くは
葉は花の如くは毒を煮くは茶摘くは

仙臺菘

葉は花の如くは毒を煮くは茶摘くは
葉は花の如くは毒を煮くは茶摘くは
葉は花の如くは毒を煮くは茶摘くは

名はめく仙臺と秋や百子本

薬種

眉作りの花

一説鬼薊より名人州是あり眉掃ま

薊

蹴さけて足さ居る玉子の薊うね イッ 乙郎

余の州は皆あまうま 鬼 薊 上 素行

世遊むや薊のそと 唯 乙郎

花ふけくす 鬼 薊 心 星

まわす 鬼 薊 由 良

鬼の名 油 薊

名 薊 薊

櫻草

花をよも 櫻 草 花 草 花 草 花 草

九輪州七重州 花 草 花 草 花 草

花 花 草 花 草 花 草 花 草

花 花 草 花 草 花 草 花 草

花 花 草 花 草 花 草 花 草

花 花 草 花 草 花 草 花 草

花 花 草 花 草 花 草 花 草

花 花 草 花 草 花 草 花 草

虎^{イタ}杖^{トリ}

虎杖の葉を煮て茶にするを
虎杖茶と云ふ

二月苗を生し茎葉の子粒を煮上り茶を煎るは虎杖の茶なり
七月を煮し九月を煮るは虎杖の茶なり

虎杖の葉を煮て茶にするを
虎杖茶と云ふ

虎杖の葉を煮て茶にするを
虎杖茶と云ふ

茗荷竹

茗荷竹の葉を煮て茶にするを
茗荷竹茶と云ふ

三月菜

鱈の歯しとまらや茗荷味 上サ 由儀
菜 毛 菜 毛 菜 毛

三月大根

生魚よりき三月大根うね、真壽

根伸のちとよ三月大根うね、砂来

青麦

青麦の上とねえ折つ折、古、相古

青麦や吹矢ふくさむ里の原、十條

白波をえとねよ青——麦の伸

華鬘 クワン

和 美勢州伝稱あり言き尺余紫田うりしうりちとく
二月並前よををしく使居紅を房を作ると花をちと
せくも鬘を物うくちとせく 花 花ををを色鬘耳しとく
上る名花弁あり下よ一の舌をとせる中留よ鬘色の黒けり表裏

おろし——やうやう
起る倍層社再と云

丁子草

和 紫の葉の葉は心の中の壁筋ちと白く色丁子草
花は黄を云く

はくちのうら高よまん美勢州、優、

佐草をうらうらとちと丁子草、巢、

佐草をうらうらとちと丁子草、優、

弥生山

自注面白君はよらとを思の山と
しうらうら

佐以米よちのくくちと山、由儀

春の山

又此うら山の八重山人もと山、古、園、更

整る若をうらうらと山、林、産

春の鮎

春の色

江の鮎のこゝろ	鮎	尾村	波路	如白	常陸	頃山	水
こゝろ	鮎	尾村	波路	如白	常陸	頃山	水
こゝろ	鮎	尾村	波路	如白	常陸	頃山	水
こゝろ	鮎	尾村	波路	如白	常陸	頃山	水
こゝろ	鮎	尾村	波路	如白	常陸	頃山	水
こゝろ	鮎	尾村	波路	如白	常陸	頃山	水
こゝろ	鮎	尾村	波路	如白	常陸	頃山	水
こゝろ	鮎	尾村	波路	如白	常陸	頃山	水
こゝろ	鮎	尾村	波路	如白	常陸	頃山	水
こゝろ	鮎	尾村	波路	如白	常陸	頃山	水

春朗詠

春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠
春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠
春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠
春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠
春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠
春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠
春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠
春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠
春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠
春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠	春朗詠

梅の戸へ下りて是より舟の次
 十おろし居てうら返りて去りぬ
 黄をりちりし春あり日のぬくそ
 りきまを遠岨の折る世梅は
 正降よけし位をり世ふの那
 正降やとまきと並おく裏と並
 春ももやちのふり春見せ二日く如
 春のそよき並ていもよりの所へふ
 おろしよの明河所や松のそり
 美交
 島沙
 三光
 美由
 方中
 卯月
 以肅
 宇山
 山方

春九十七

春のそよき並ていもよりの所へふ
 春ももやちのふり春見せ二日く如
 春のそよき並ていもよりの所へふ
 おろしよの明河所や松のそり
 正降やとまきと並おく裏と並
 正降よけし位をり世ふの那
 りきまを遠岨の折る世梅は
 黄をりちりし春あり日のぬくそ
 十おろし居てうら返りて去りぬ
 梅の戸へ下りて是より舟の次
 美交
 島沙
 三光
 美由
 方中
 卯月
 以肅
 宇山
 山方

暮小帆は波走つゝまうまうの海
 舟の音をきくや孫生の夕月夜
 人のちかき船夫の子あやまう暮
 町の夜はふまゝさやほし月
 舟の音も船夫らきふ魚うめ
 夕飯の山あもさや——梅のむ
 舟の音もさうさやませやゆへ
 初年や雨守の命さやまらさう
 暮る裏や雪のふら暮の月

巨 楯
 右 眠
 菟 玉
 産 産
 湖 松
 今 松
 好 甫
 今
 ト 木

春九十八

暮るや踏石つゝま産木産
 舟の音も船夫らきふ魚うめ
 夕飯の山あもさや——梅のむ
 舟の音もさうさやませやゆへ
 初年や雨守の命さやまらさう
 暮る裏や雪のふら暮の月
 舟の音も船夫らきふ魚うめ
 夕飯の山あもさや——梅のむ
 舟の音もさうさやませやゆへ
 初年や雨守の命さやまらさう
 暮る裏や雪のふら暮の月

静 里
 菟 穀
 波 静
 古 寺
 菟 子
 志 考
 今
 結 海
 左 郎

種くさきうきあふ雪写う時、乙也
ふくつらうきあふ岷や叶をゆる、冬守
あふらや雪のふり何よのききき、曇平
黄もや旭のちのちのちのちのち、三子丸
門おや舟のちのちのちのちのち、旭
古若の式もさきさきさき、唐氏
およげさきさきさきさき、月、春秋
のしる日よ新をきききき、今
いゝあささきさきさき、松、江山

春九十九

長居ききさきさきさき、風、蟻城
あふの遠きさきさき、山、龜手
岷のちのちのちのちのち、菊、像
まらうさきさきさきさき、子、跡、池
あふらあきさきさき、サカ、之、宇
あふら人よさきさき、小、松、系、布、火
井、美、水、ほ、き、あ、あ、の、常、あ、の、ら、昌、復、鳥
夕、風、や、柳、ら、ふ、く、お、吹、る、お、新、多、座
ら、折、る、さ、き、さき、さき、柳、ら、あ、月、雲

何れは注連をくし古井を杉のむ マコ 乙良
中へ人への訪をも垣根よまの雪、
葉を布 シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
好 シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
初雪やうらまき シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
岸やふら根を シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
ふら シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
は シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
草 シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ

何れは注連をくし古井を杉のむ マコ 乙良
中へ人への訪をも垣根よまの雪、
葉を布 シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
好 シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
初雪やうらまき シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
岸やふら根を シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
ふら シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
は シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ
草 シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ シラ へ

春のさかすかにけしきもよきまのま 金陸交
 けむるけり けむるけり けむるけり 令
 手玉やきうてきうてきうてきうて けり 鹿
 けらきうてきうてきうてきうて 集壽
 波傳やうるむきうてきうてきうて 山 祐
 けりやうてきうてきうてきうて けり 孝 崎
 年終やうてきうてきうてきうて 之 柳
 けりやうてきうてきうてきうて 上 巴 祝
 けりやうてきうてきうてきうて 山 珠 水

麻中きくのけしきもよきまのま 傳
 枸杞のまもゆりやるのまもも 令
 けりやうてきうてきうてきうて 令
 子をもよのけしきもよきまのま 思 成
 遠征のまもゆりやるのまもも 下 舟 船 右
 幼婦やうてきうてきうてきうて 花 遊
 明方のまもゆりやるのまもも 得 月
 初宵のまもゆりやるのまもも 舟 水
 けりやうてきうてきうてきうて 芝 萱

手を雷よほけりてむのふえ分トヤ代トヤ招トヤの
 細りつる遠き隣や福島の意 先折
 枯らぬよ空をくくく心危うぬトヤ一トヤ修
 こころ日のまをそ嬌き接種うれ、毒招
 望日の予つんそ痛る夜を接種トヤ招
 さらく陸をききんうそつり磯、三トヤ積
 各々の家来をううそつり磯、雲川
 ぬるこの雨や未を未の叶をくそ 雲トヤ郊
 江の根いつのそまうあり毒の山 吐トヤ雷

春百二

車よぬり隣ひくくし梅のそと、其トヤ太
 聲の名はあそ呼ふをきそうめのをと、粉トヤ春
 浮き舟の胸水はらし、そつりの海、士トヤ殿
 山を歩よしそ里河ういのかたなり、和トヤ字
 新々眼よみせり毒の麦畠 清トヤ良
 空雀鳴下る魚釣る海せぐ 春トヤ海
 あつりこをきつる毒の蛇ありけ 精トヤ雲
 貝よゆる風やそりく裾をふく 子トヤ布
 空の返をきつるぬ中、梅物 一トヤ五トヤ終

神の名はさき柱あり一正代の春 サカ 薫岱
そまや猿安やまむさう大歩 三ハ 杜鴻
何さうへやま三門の化糖雷 カ 丹岩
響の人の安形よてもやねの月 下 月杵
まらしくは月日うちまらさうの橋 上 毛分尾
昭まらしくはあさくはむつ物在 架 破山
そよあさくの中の 望望 ハ 是うよあり ハ 而先
山徳やとねさつさきさくの 実 上 吉民

美州やまらき又降るるの春、舎用
橋よまらき、舟やむらさきの梅白ふ 下 舟樓
田をあらやさうらうの 藤さくの 橋うね サキ 本橋
向まや黄蓮さくの 庵の、州、の舎
古若やまらき、みる内人教 ハ 柳江
美能や信入まらき、中よまらき、海路
響の 中や ハ まらき、浪の泡、一岸
響の 中や ハ まらき、峰の坊、一岸
しんの 中や ハ 風のまらき、おねくれ、康年

力のまゝ原よまゝ舞ふ山懐くぬ
 一毒
 田一草の境も雪やまゝの州
 一松
 黄もよ風呂の舟うつらぬ
 木枝
 最尾の芥もつぎう免の足
 新湖
 空しく二の夢をまゝ初穂、宗最
 一馬
 うくしものあつしつゆをまゝ降、一降
 降 平子 姓 融
 降雪や指の毛もまゝのよ
 下 昇 栲
 雪もまゝあるまゝの雪のまゝ
 上 板 室
 人まがくふらむら幸その毒



1715

